

富士宮市文化財年報

第1号

平成22年度



2012

富士宮市教育委員会

富士宮市文化財年報

第1号

平成22年度

2012
富士宮市教育委員会

例 言

- 1 本書は、平成 22 年度に実施した富士宮市内における文化財関係事業の概要をまとめたものである。
- 2 文化財関係事業は、文化財保存管理事業、埋蔵文化財事業、郷土資料館事業、歩く博物館事業、その他の事業に分類した。
- 3 本書の執筆・編集は、富士宮市教育委員会富士山文化課学術文化財係各担当が行った。

4 平成 22 年度文化財関係組織

教 育 長	佐野 敬祥
教 育 次 長	渡井 一成
富 士 山 文 化 課 長	渡井 一信
学術文化財係主幹兼係長	馬飼野 行雄
学術文化財係主幹	伊藤 昌光（歴史民俗担当）
学術文化財係主任学芸員	渡井 英誉（埋蔵文化財担当）
学術文化財係主査	保竹 貴幸（埋蔵文化財担当）
学術文化財係主事	小泉 工（文化財管理担当）
学術文化財係学芸員	梶山 沙織（歴史民俗担当）
学術文化財係嘱託員	田中 城久（埋蔵文化財担当）
学術文化財係嘱託員	佐野 恵里（埋蔵文化財担当）
学術文化財係嘱託員	志村 和恵（歴史民俗担当）

《表紙写真：富士山本宮浅間大社消防訓練の様子》

目 次

富士宮市文化財年報の創刊にあたって	1
I 平成 22 年度の文化財保護事業	5
II 文化財保存管理事業	7
1 文化財保護審議会	7
2 指定文化財保存管理事業	7
(1) 白糸ノ滝史跡等買上げ事業	
(2) 史跡大鹿窪遺跡管理事業	
(3) 指定文化財（樹木）保護対策事業	
(4) 文化財防火デー	
(5) 指定文化財保存・修理事業への助成（補助事業）	
3 文化財指定事業	10
(1) 国史跡「富士山」の指定	
4 未指定文化財保存管理事業	11
(1) 旧芝川町内文化財等看板修正事業	
(2) 旧芝川町指定文化財調査事業	
(3) 年中行事調査事業	
III 埋蔵文化財事業	13
1 発掘調査（報告書作成）	13
2 試掘・確認調査	13
(1) 辻遺跡（下柚野）	
3 遺跡分布調査	15
(1) 現地踏査	
(2) 資料整理	
4 資料整理作業	15
IV 郷土資料館事業	16
1 展示	16
(1) 常設展示	
(2) 企画展示	
2 講演会	16
(1) オールコック富士登山 150 年記念講演会	
3 資料収集・保存管理	17
(1) 資料収集	
(2) 保存管理	
4 古文書等解説刊行事業	17
(1) 上井出財産区有文書	
5 その他	17
(1) 後藤清吉郎資料館協力	
(2) 郷土資料館通信の発信	

(3) 調査協力	
V 歩く博物館事業	18
1 探索会	18
(1) 市主催探索会	
(2) 探索会講師派遣	
2 コース策定事業	18
(1) 現地踏査	
(2) 検討会開催	
(3) 芝川地区検討コース	
VI その他の事業	20
1 問合せ対応	20
2 小中学校総合学習への対応	20
3 富士山まちづくり出前講座	20

【資料】

資料 i 旧芝川町指定文化財調査報告	21
1 上稲子八幡社の厨子	21
2 龍興寺の厨子	21
3 芭蕉天神宮本殿	22
4 木造願満祖師坐像	23
5 木造韋駄天立像	24
6 木造金剛目地藏菩薩立像	25
7 木造阿弥陀三尊像	26
8 阿弥陀観音勢至の軸	29
9 西山本門寺梵鐘	30
10 小塚遺跡出土品	32
11 富士浅間神社の棟札	33
12 石造三面観音立像	34
13 釜口峡	34
14 桜峠	35
15 天然記念物調査樹木一覧	36
資料 ii 「オールコックの富士登山」150 年記念展示会配布資料	37
資料 iii 富士宮市歩く博物館探索会「西山・大鹿窪地区」配布資料	41
資料 iv 富士宮市歩く博物館探索会「上稲子地区」配布資料	45
資料 v 「富士宮市歩く博物館」案内	49
資料 vi 富士宮市内指定文化財一覧	50

富士宮市文化財年報の創刊にあたって

富士山文化課長（市立郷土資料館長） 渡 井 一 信

この度、多くの方々のご協力を得て、『富士宮市文化財年報』第 1 号を刊行できるに至ったことは、誠に意義深く、喜びにたえない次第であります。

創刊にあたり、ここに至るまでの富士宮市における文化財保護について、文化財保護行政を掌る富士宮市教育委員会富士山文化課、及びその普及・周知の一翼を担ってまいりました富士宮市立郷土資料館を代表してその歴史を概観いたします。

さて、平成 24 年度に市制施行 70 周年を迎える富士宮市ですが、文化財保護行政の本格的な始動は市制施行 20 周年にあたる昭和 37 年の「富士宮市文化財保護に関する条例」の制定に因るものと認識しています。翌 38 年には「富士宮市文化財保護委員会規則」も施行され、ここに富士宮市指定文化財の位置付けが明確になりました。条例に基づき新たに委嘱された文化財保護委員会の専門委員による調査・審議を経て、昭和 40 年 5 月 10 日には、富士宮市初となる 8 件の市指定文化財が誕生することになります。

このとき指定された 8 件は、「富士曼荼羅」の名称で指定された絵画 2 点、「礎青磁しのぎ大酒会壺」「礎青磁浮牡丹香炉」「人形手青磁大茶碗」「古瀬戸の瓶子」「伝源義助大薙刀」の名称で指定された工芸品 5 点、「後陽成天皇の宸翰」の名称で指定された書跡 1 点となっています。

「富士曼荼羅」2 幅のうち 1 幅は、昭和 52 年 6 月 11 日に「絹本着色富士曼荼羅図」として国の重要文化財に指定され、もう 1 幅も昭和 56 年 10 月 23 日に県指定有形文化財に指定されています。その他、「礎青磁しのぎ大酒会壺」は「青磁蓮弁文大壺」に、「礎青磁浮牡丹香炉」は「青磁浮牡丹文香炉」、「人形手青磁大茶碗」は「人形手青磁大茶碗附屈輪彫天目台」として県指定有形文化財に昇格しています。

「富士宮市文化財保護に関する条例」は昭和 57 年 3 月に「富士宮市文化財保護条例」と改正され、それまでの富士宮市文化財保護委員会の名称が富士宮市文化財保護審議会に、その構成員も文化財専門委員の名称から文化

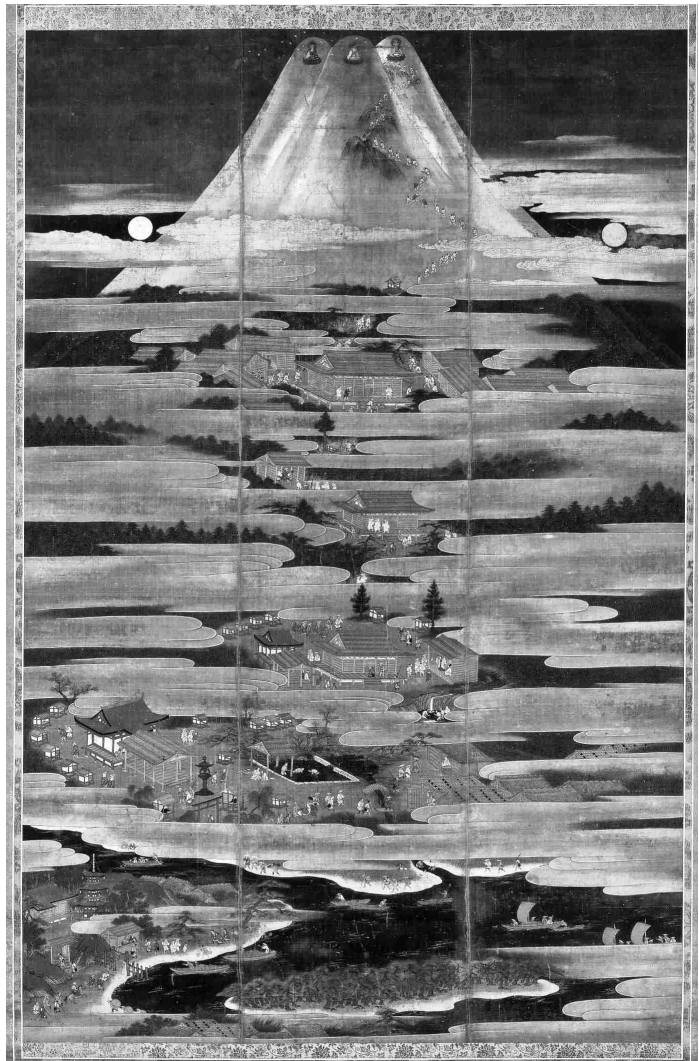


写真 1 国指定重要文化財「絹本着色富士曼荼羅図」

財保護審議会委員に改められました。また、「富士宮市文化財保護委員会規則」も同様に「富士宮市文化財保護条例施行規則」に改められ、当初 10 名以内とされていた委員定数は、改正により 15 名以内となりました。

なお、後述する富士宮市立郷土資料館の設置条例が昭和 44 年 10 月に制定されたのに伴い、富士宮市立郷土資料館運営協議会が設置されることとなり、協議会委員は文化財保護審議会委員を充てるという条文から兼務することになります。

市指定文化財が誕生した昭和 40 年時においては、国指定文化財 11 件、県指定文化財 11 件と前述のとおり市指定文化財 8 件の総計 30 件という指定状況でありましたが、その後、新たな指定や県・市指定文化財が国・県指定に昇格したこと、平成 22 年 3 月 23 日に芝川町と合併したことなどから、現在、富士宮市の指定文化財は国指定 21 件、県指定 23 件、市指定 29 件、総計 73 件を数えています。

一方、文化財保護の普及・周知の場としてその一翼を担っております富士宮市立郷土資料館は、昭和 45 年 2 月 11 日に、現在、富士宮市民文化会館の北側駐車場となっている富士宮市宮町 14 番 22 号の地に、鉄骨平屋建て床面積 163.8 平方メートルの規模をもって開館しました。以来、昭和 54 年まで市民や周辺の愛好者に活用していただいております。



写真 2 昭和 45～54 年まで開館していた旧市立郷土資料館

その後、昭和 56 年に開館した富士宮市民文化会館内に、規模の縮小を余儀なくされたものの施設は移転しました。

さらに、平成 23 年 10 月 15 日に床面積の増床を図った結果、旧資料館とほぼ同じ床面積で現在にいたっております。

このように半世紀の歴史を持つ富士宮市の文化財保護行政ですが、専門職員が配置されるのは昭和 53 年からとなります。当初は埋蔵文化財の発掘調査の専任職員として 2 名が配置され、その後は郷土資料館担当として歴史・民俗の分野にまで調査範囲を広げ、さらには平成 25 年度の登録をめざす富士山の世界文化遺産登録に向けて事業拡大を図った結果、現在、学芸員 8 名（正規職員 4 名・嘱託職員 4 名）が富士山文化課及び課内室である世界遺産推進室に籍を置き、それぞれ専門分野を担当しています。

ご承知のとおり、本来、学芸員は博物館資料の収集、保管、展示及び調査研究その他これと関連する事業を行う「博物館法」に定められた、博物館におかれる専門的職員と位置づけられておりますが、登録博物館をもたない富士宮市においては、職名として学芸員を採用しており、全員文化財保護行政の担当職員となっています。当然のことながら、これら学芸員は富士宮市立郷土資料館の併任の学芸員でもあります。

富士宮市立郷土資料館については、平成 23 年の郷土資料館リニューアルや体制の強化が図られるなか、市民から幾たびも本格的な博物館への転換が望まれてきた経緯があります。

最初は、平成元・2 年度の 2 年間に富士宮市文化財保護審議会・富士宮市立郷土資料館運営協議会の場で、8 回にわたり協議がなされ、「のぞましい博物館像（博物館建設に向けての協議結果報告書）」がまとめられました。そこでは、設置目的・設置主体など富士宮市にとってののぞましい博物館像と設置にあたっての検討課題が討議されました。

つづく平成 3 年 1 月 19 日には、富士宮市民文化会館において「富士山と博物館（富士山麓に夢を語る）」と題したシンポジウムが開催され、参加した市民の中の有志 20 名の手になる「富士宮市における『望ましい博物館像』についての提言」がまとめられ、市民目線の博物館像が語られました。

いずれも、博物館法による博物館を市・県いずれかの手で建設して欲しいとの提言でしたが、目覚ましい経済成長が見られた高度成長期からバブル崩壊による緊縮経済への転換期であり、財政面から博物館建設の実現は遠のくこととなります。

こうした経緯をふまえ、平成 5 年度には富士宮市の機構改革が行われ、組織的には社会教育課から独立して文化課となり、係も文化振興係から文化財係が独立して専門性を高めていく方向のなか、新たに「富士山文化研究」事業と「歩く博物館」事業が展開されることになります。

「富士山文化研究」事業においては、10 人の学識経験者を委員とする富士山文化研究会が発足し、「富士山文化塾講演会」20 回を開催することで、その講演会記録をもとに『富士山文化塾叢書』第 1～20 集を刊行しました。『富士山文化塾叢書』の発刊は、単行本としての内容の濃さもあり、その後、富士山文化は富士宮市の文化財保護行政の基点となっていきます。



写真 3 『富士山文化塾叢書』 第 1～20 集

平成 9 年度刊行となる『史蹟人穴』と、平成 16 年度刊行の『村山浅間神社調査報告書』にいたる動きも富士山文化推進の象徴的事業となりました。

同時に、文化塾開催に伴い 11 回開催された「富士山文化塾現地学習会」は、その後の「歩く博物館」事業に発展していくこととなります。「歩く博物館」については、従来の箱物行政を脱却し、富士宮市内に点在する文化財（歴史・民俗・自然など）を歩いて巡り、見て、ふれ、感じてもらうものと位置づけ、各地域の特色を活かした 18 コースを設定して、探索会の開催を通じて広く普及につとめています。現在、平成 22 年に合併した旧芝川町域も加えた補正作業が行われているところであります。

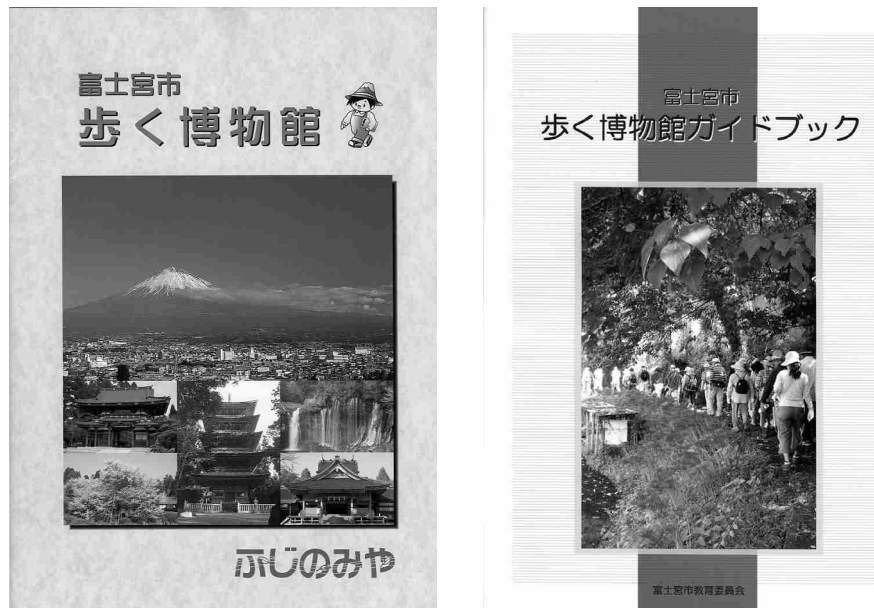


写真 4 歩く博物館ガイドブック（左：初版 右：改訂版）

富士宮市として蓄積してきた富士山文化の調査・研究は、平成 18 年度から静岡・山梨両県を中心に推進活動が起きた富士山の世界文化遺産登録でその成果が試されようとしています。

静岡県に追随する形で平成 19 年度には文化課に世界遺産推進担当 2 名を配属、翌 20 年度からは世界遺産推進係として 3 名、推進活動が濃密となった 22 年度からは、課名も富士山文化課と改称するとともに、文化財係を学術文化財係に改めました。23 年度には富士山文化課の課内室として、併任 2 名を含む 7 名体制で世界遺産推進室を設置し、平成 25 年度の登録を目指しています。

文化財保護行政の本格的な始動から半世紀、専門職員として当初の分野である埋蔵文化財から、その後の歴史・民俗の分野において、多くの方から史料や情報の提供をいただき、調査に協力していただいた結果が、この文化財年報の創刊に繋がってきたものと思います。

ここに深く感謝申し上げますとともに、次年度以降についても、文化財の保護を図りながら、市内の歴史的、文化的資産の一層の掘り起こしに務め、調査成果の市民の皆様への還元を第一義的な使命として事業を実施したいと考えています。

最後になりますが、市民の皆様と共に富士宮市の豊かな歴史を守り、後世に正しく伝えていくため、今後共ご支援、ご協力下さるようお願いいたします。

I 平成 22 年度の文化財保護事業

1 概要

富士宮市における平成 22 年度の文化財保護関連事業は、平成 22 年 3 月 23 日に富士宮市と芝川町が合併したことにより、芝川地域に関連する事業を優先して実施した。また、富士山の世界文化遺産登録に向けての関連事業を実施した。

(1) 文化財保存管理事業

合併に伴い旧芝川町指定文化財 19 件は指定が解除されたが、これらの文化財の取り扱いについての基礎資料を得るため、専門家に依頼して再調査を行った。今後は、調査結果を基に市の文化財指定について協議を進めていく予定である。

国指定史跡「大鹿窪遺跡」については、静岡県世界遺産推進課の主導で保存管理計画が策定され、今後の保存活用の指標が示された。

富士山の世界文化遺産登録推進事業に関連しては、富士山を国の史跡に指定するための作業が静岡県世界遺産推進課の主導の下に進められ、平成 23 年 2 月 7 日付けで史跡「富士山」に指定された。市内では富士山八合目以上の山体と、富士山本宮浅間大社・山宮浅間神社・村山浅間神社・大日堂が指定地に含まれている。

また、平成 23 年 3 月 15 日には静岡県東部地震が発生し、白糸ノ滝の護岸や人穴富士講遺跡の碑塔群、村山浅間神社の石垣等に甚大な被害をもたらした。破損した文化財は危険回避のための応急措置を施し、平成 23 年度から国・県の補助金を受けて取り組む予定である。災害から文化財を守るための対策が、今後の課題となった。

(2) 埋蔵文化財事業

当該年度は、開発行為に伴う発掘調査は行われなかった。試掘・確認調査は 7 箇所を実施し、辻遺跡で縄文時代中期後半の遺構・遺物を確認した。

埋蔵文化財包蔵地地図及び地名表を改定するための遺跡分布調査を、国・県の補助金を受けて芝川地域で実施した。

(3) 郷土資料館事業

合併に伴い、旧芝川町の柚野資料館及び内房民俗資料館の収蔵品整理事業を実施し、資料の整理を行い、収蔵資料目録を作成した。両施設は資料の収蔵庫として使用し、簡易な展示を行い希望者には公開していく予定である。

展示事業は、当該年度が初代英国公使ラザフォード・オールコックの富士登山から 150 年目にあたるため、富士山開山祭に合わせ、富士山環境交流プラザを会場として展示会を開催した。

(4) 歩く博物館事業

芝川地域に 5 つのコースを仮設定して検討を進め、9 月には西山・大鹿窪地区、2 月には上稲子地区を会場として探索会を開催した。平成 23 年度には残りの 3 コースを会場として探索会を実施し、平成 24 年度以降に案内看板とパンフレットを作成する予定である。

(5) その他の事業

小中学校の総合学習（富士山学習）への対応と、富士山まちづくり出前講座の開催が主なものであった。特に、富士山の世界文化遺産登録へ向けての動きや、史跡「富士山」の指定などにより、富士山への関心の高まりが見受けられた。

2 文化財関連事業一年の歩み

- 平成 22 年 3 月 23 日 富士宮市と芝川町が合併し、新富士宮市誕生。
- 平成 22 年 4 月 1 日 課名を富士山文化課に、係名を学術文化財係に改称。
- 平成 22 年 5 月 1 日 平成 22 年度第 1 回文化財保護審議会開催。
- 平成 22 年 5 月 10 日 旧芝川町内文化財等看板修正事業実施。
- 平成 22 年 5 月 31 日 埋蔵文化財調査報告書『代官屋敷遺跡Ⅱ』刊行。
- 平成 22 年 6 月 6 日 内房(尾崎)田の神送り調査実施。
- 平成 22 年 6 月 15～18 日 辻遺跡確認調査実施。
- 平成 22 年 6 月 25 日 オールコック富士登山 150 年記念展示会開催(7 月 11 日まで)
- 平成 22 年 7 月 28 日 県教育委員会、「富士山」史跡指定意見具申書提出。
- 平成 22 年 7 月 29 日 県世界遺産推進課主催第 1 回史跡大鹿窪保存管理計画策定会議開催。
- 平成 22 年 8 月 15・16 日 富士川・芝川流域盆行事調査実施。
- 平成 22 年 9 月 1 日 郷土資料館収蔵品整理事業開始。(平成 23 年 2 月 28 日まで)
- 平成 22 年 9 月 8 日 歩く博物館探索会コース策定検討会開催
- 平成 22 年 9 月 11 日 オールコック富士登山 150 年記念講演会開催。
- 平成 22 年 9 月 11 日 第 1 回歩く博物館探索会「富士根北地区」開催。
- 平成 22 年 9 月 27～29 日 郷土資料館収蔵品くん蒸事業実施。
- 平成 22 年 10 月 1 日 旧芝川民俗資料館収蔵資料目録作成作業実施。
- 平成 22 年 10 月 5 日 県世界遺産推進課主催第 2 回史跡大鹿窪保存管理計画策定会議開催。
- 平成 22 年 10 月 5 日 遺跡分布調査開始。(平成 23 年 2 月 28 日まで)
- 平成 22 年 10 月 10 日 大風により、市指定史跡人穴富士講遺跡に被害発生。
- 平成 22 年 10 月 27 日 旧芝川町指定文化財再調査実施。(12 月 10 日まで随時実施)
- 平成 22 年 11 月 8 日 旧柚野民俗資料館収蔵資料目録作成作業実施。
- 平成 22 年 11 月 10 日 第 2 回歩く博物館探索会「西山・大鹿窪地区」開催。
- 平成 22 年 11 月 13 日 郷土資料館企画展「合併記念写真展」開催。(平成 23 年 2 月 28 日まで)
- 平成 22 年 12 月 21 日 平成 22 年度第 2 回文化財保護審議会開催。
- 平成 22 年 12 月 22 日 県世界遺産推進課主催第 3 回史跡大鹿窪保存管理計画策定会議開催。
- 平成 23 年 1 月 14・15 日 市内どんど焼き調査実施。
- 平成 23 年 1 月 18 日 火伏念仏調査実施。
- 平成 23 年 1 月 26 日 文化財防火デー。防火訓練実施。
- 平成 23 年 1 月 31 日 県世界遺産推進課主催第 4 回史跡大鹿窪保存管理計画策定会議開催。
- 平成 23 年 2 月 7 日 「富士山」国史跡指定。
- 平成 23 年 2 月 8 日 平成 22 年度第 3 回文化財保護審議会開催。
- 平成 23 年 2 月 26 日 第 3 回歩く博物館探索会「上稲子地区」開催。
- 平成 23 年 3 月 1～31 日 出土資料整理作業実施。
- 平成 23 年 3 月 5 日 指定文化財(樹木)保護対策事業実施。
- 平成 23 年 3 月 15 日 富士宮市を震源とする静岡県東部地震が発生し、富士宮市は震度 6 強を記録する。この地震で、村山浅間神社・人穴富士講遺跡等の石垣や石灯籠等が倒壊する。
- 平成 23 年 3 月 31 日 県世界遺産推進課『史跡「大鹿窪」保存管理計画』策定報告書刊行。

II 文化財保存管理事業

1 文化財保護審議会

第1回

日時：平成22年5月1日

内容：新委員2名委嘱状交付。

国史跡「千居遺跡」範囲確認調査事業、市有形文化財「妙蓮寺の客殿」屋根葺き替え事業について報告。埋蔵文化財分布調査事業、オールコック富士登山150年記念展示事業、上井出区有文書解説事業について説明。旧芝川町指定文化財の調査について協議。

第2回

日時：平成22年12月21日

内容：「妙蓮寺の下庫裏・大庫裏・玄関」の文化財指定について諮問。

旧芝川町指定文化財19件調査結果の報告。

第3回

日時：平成23年2月8日

内容：「妙蓮寺の下庫裏・大庫裏・玄関」視察。

2 指定文化財保存管理事業

(1) 白糸ノ滝史跡等買上げ事業

国指定名勝及び天然記念物白糸ノ滝の富士山側(北東側)上部平地に占有する売店街の空店舗が、名勝としての景観を阻害しているため、その改善を図るためと、当該地の地下を流下する白糸ノ滝の伏流水の保全を図るために、空店舗部分の1,102㎡を買い上げ空地化した。今後は、良好な景観の保全に配慮した整備を計画する予定である。



写真5 白糸の滝

(2) 史跡大鹿窪遺跡管理事業

平成20年3月28日付けで国指定された史跡大鹿窪遺跡は、旧芝川町において埋め戻し保存され、指定地内約6,600㎡は草刈等による管理が実施されており、これを継続して実施した。

また、静岡県が策定した「史跡大鹿窪遺跡保存管理計画」により、今後の保存活用の指標が示された。



写真6 大鹿窪遺跡

(3) 指定文化財（樹木）保護対策事業

富士宮市内に存在する指定天然記念物（樹木）は、国特別天然記念物「狩宿の下馬ザクラ」をはじめとして、県指定 8 件、市指定 2 件の 11 件である。市では「狩宿の下馬ザクラ」に対して、昭和 50 年代より養生事業を継続し、今年度は平成 23 年 3 月 5 日より同 25 日にかけて、施肥・消毒等を行った。また、県・市指定物件は、順次 2 年毎の養生事業を組み、今年度は県指定「猪之頭のミツバツツジ」を対象として同期間に実施した。



写真 7 狩宿の下馬ザクラ



写真 8 施肥の様子

(4) 文化財防火デー

文化財防火デーは、文化財を火災や震災などの災害から守るため昭和 30 年に定められ、この日を中心に全国で文化財防火運動を展開し、文化財愛護意識を高めている。

富士宮市内では、浅間大社と大石寺で防災訓練を実施した。また、消防本部による消防設備の点検及び東京電力(株)富士支社の協力を得て漏電検査を行った。

表 1 防火訓練・漏電検査等実施文化財一覧

	建造物名	防災訓練	漏電検査等	備考
1	富士山本宮浅間大社本殿・社殿	1 月 26 日(水)		
2	大石寺五重塔	1 月 26 日(水)		御影堂解体修理中
3	妙蓮寺(客殿)		1 月 28 日(金)	
4	北山本門寺(美術品収蔵庫)		1 月 25 日(火)	
5	西山本門寺		1 月 25 日(火)	



写真 9 浅間大社消防訓練



写真 10 大石寺消防訓練

(5) 指定文化財保存・修理事業への助成（補助事業）

ア 富士山本宮浅間大社防災施設保守点検等補助事業

国指定重要文化財「富士山本宮浅間神社本殿」、及び県指定有形文化財「富士山本宮浅間大社社殿」の自動火災報知設備・加圧式消火設備等 36 窓・15 基・1 台の防災施設保守点検等文化財管理業務に対して、市要綱に基づき補助金を交付した。



写真 11 浅間大社社殿



写真 12 浅間大社漏電検査

イ 西山本門寺御宝蔵保存整備補助事業

西山本門寺の御宝蔵(6.363m×5.454m)は、本堂背面の山林を背負う高台に位置し、正面が木造門扉で三方をブロック塀に囲まれた敷地の中央に南面して建つ。昭和 6 年(1931)に改修の記録があるが、それ以前の歴史は不明である。内部は一室であり、正面奥に間口 7.14 尺(2.163m)、奥行 4.45 尺(1.348m)で唐破風屋根の厨子が設けられ、その中に、国指定重要文化財の「紙墨法華経」・「紺紙金字法華経」・「法華證明鈔」・「日蓮遷化記録」等の書跡類が納められていた。しかし、樹木の成長等が日照の減少や高湿度の環境を生み出して御宝蔵の腐朽を進め、保存に対して劣悪な状態となっていた。これを危惧した西山本門寺は文化庁補助事業「美術工芸品防災施設事業」をもって内部の改装と空調機器の設置を実施した。市は、これに対して市要綱に基づいた補助金を交付した。



写真 13 西山本門寺本堂



写真 14 御宝蔵修理状況

ウ 人穴富士講遺跡倒木撤去・玉垣修復補助事業

平成 22 年 10 月 10 日の大風により、市指定史跡人穴富士講遺跡（人穴浅間神社境内）のモミが倒れ、溶岩洞窟人穴の入り口を塞ぎ洞窟周囲の玉垣を破損した。市は、人穴浅間神社が実施した倒木の撤去・玉垣修復事業に対し、市要綱に基づき補助金を交付した。

3 文化財指定事業

(1) 国史跡「富士山」の指定

ア 申請（具申書の提出）

静岡県教育委員会は、「富士山は時代を超え、宗派を越えて日本全国から信仰されてきた富士山信仰を理解するうえで、不可欠できわめて重要な信仰施設及び関連遺跡である。」として、平成 22 年 7 月 28 日付けで文部科学大臣宛に意見具申した。（具申書抜粋）

- 1 指定の対象の名称 富士山
- 2 指定の対象の所在地 静岡県富士宮市宮町 984 番 1 外 55 筆等
- 3 指定の対象地域の面積 4,176,527.22 m²
- 4 指定の対象地の概要

表 2 指定対象地の名称・所有者・面積一覧

名 称	国有地		市町有地		民有地		合 計	
	筆数	面積m ²	筆数	面積m ²	筆数	面積m ²	筆数	面積m ²
山 頂 信 仰 遺 跡		25,572.41				4,016,901.06		4,042,473.47
富士山本宮浅間大社					24	60,924.82	24	60,924.82
山 宮 浅 間 神 社					9	9,995.00	9	9,995.00
村 山 浅 間 神 社				894.24	10	35,007.06	10	35,901.30
須 山 浅 間 神 社					7	8,922.63	7	8,922.63
富 士 浅 間 神 社			1	174.00	4	18,136.00	5	18,310.00
合 計		25,572.41	1	1,068.24	54	4,149,886.57	55	4,176,527.22

イ 指定（指定の告示）

文部科学省は平成 23 年 2 月 7 日付け文部科学省告示第 11 号によって、「富士山」を以下のとおり国指定史跡に指定した。（文化庁ホームページ抜粋）

- 1 指定年月日 2011.02.07(平成 23.02.07)
- 2 指 定 基 準 三．社寺の跡又は旧境内その他祭祀信仰に関する遺跡
- 3 所 在 地 山梨県富士吉田市、南都留郡富士河口湖町・鳴沢村、静岡県富士宮市、裾野市、駿東郡小山町
- 4 解 説 文 山梨県と静岡県の境界に聳える我が国最高峰の火山で、我が国を代表する信仰の山。古代の遙拝、修験者による登拝から、戦国時代には一般信者の登拝へ、さらには江戸時代の富士講へと信仰の広がりを見せた。山岳信仰のあり方を考えるうえで重要。

ウ 富士宮市の史跡「富士山」構成文化財

史跡「富士山」のうち、富士宮市に関連する文化財は、山頂信仰遺跡・富士山本宮浅間大社・山宮浅間神社・村山浅間神社の 4 箇所、市指定第 25 号史跡「山宮浅間神社」（昭和 60 年 3 月 11 日）は、富士宮市文化財保護条例第 5 条第 3 項に従い解除された。よって、市内指定遺跡は、国指定 21 件・県指定 23 件・市指定 29 件、計 73 件となった（なお、平成 24 年 1 月 24 日付け文部科学省告示第 11 号によって、人穴富士講遺跡と大宮・村山口登山道が追加指定された。）

4 未指定文化財保存管理事業

(1) 旧芝川町内文化財等看板修正事業

平成 22 年 3 月 23 日、芝川町との合併によって引き継がれた指定文化財、その他文化財 38 件に設置されていた説明板等の「芝川町」標記部分を「富士宮市」に変更した。

(2) 旧芝川町指定文化財調査事業

富士宮市と芝川町の合併に伴い、指定が解除された旧芝川町指定文化財の再調査を実施した。その内訳は、建造物 3 件、彫刻 4 件、工芸 2 件、考古資料 1 件、歴史資料 2 件、史跡 2 件、天然記念物 6 件の合計 20 件であった。

調査は富士宮市文化財保護審議会委員に依頼し、担当外の分野については県内外の専門家に依頼した。

表 3 旧芝川町指定文化財一覧（資料 i 参照）

	種別	名 称	所在地	所有者	指定年月日
1	建造物	上稲子八幡社の厨子	上稲子 1630	八幡宮	S.53.3.29
2	建造物	龍興寺の厨子	内房 3716	龍興寺	S.58.10.5
3	建造物	芭蕉天神宮本殿	内房 5820	芭蕉天神宮	H.19.6.7
4	彫刻	木造願満祖師坐像	内房 2931	本成寺	S.47.9.1
5	彫刻	木造韋駄天立像	内房 4067	祥禅寺	S.49.6.5
6	彫刻	木造金剛目地藏菩薩立像	上柚野 197	延命寺	S.58.10.5
7	彫刻	木造阿弥陀三尊像	内房 3716	龍興寺	S.58.10.5
8	工芸品	阿弥陀観音勢至の軸 (阿弥陀三尊雲越之来迎図)	上柚野 197	延命寺	S.47.9.1
9	工芸品	西山本門寺梵鐘	西山 671	本門寺	S.47.9.1
10	考古資料	小塚遺跡出土品	弓沢町 150	富士宮市教育委員会	S.47.9.1
11	歴史資料	富士浅間神社の棟札	内房 3388	浅間神社八幡宮	S.49.6.5
12	歴史資料	石造三面観音立像	内房峯	峯・尾崎町内会	S.52.2.17
13	史跡	釜口峡	長貫 1038-1	河川敷外	S.47.9.1
14	史跡	桜峠	上柚野 1426	私有地	S.47.9.1
15	天然記念物	猫沢のカシワ	猫沢 98-2	篠原幸夫	S.47.9.1
16	天然記念物	西山のヒヨクヒバ	西山 1500	望月亨	S.49.6.5
17	天然記念物	本門寺のイヌマキ	西山 671	本門寺	S.56.12.18
18	天然記念物	楠金のスダジイ	長貫 854	佐野希嘉	S.56.12.18
19	天然記念物	寛妙寺のイヌマキ	内房 2642	橋上町内会	S.56.12.18
20	天然記念物	行道のウスギモクセイ	内房 4835	望月喜三治	S.56.12.18

(3) 年中行事調査事業

市内で行われる種々の民俗行事について調査を行った。

ア 田の神送り調査

日 時：平成 22 年 6 月 6 日

場 所：富士宮市内房（尾崎集落）

調査者：富士山文化課課長、学芸員 1 名

内 容：内房地区で行われている「田の神送り」を調査した。これは、集落の田植えが終わった後、田の神を集落の外まで送る行事である。尾崎集落では、集落住民（大人・子供）がゴヘイを持ち、太鼓をたたきながら集落内を行列して歩き、集落の外れまで行く。

イ 盆行事調査

日 時：平成 22 年 8 月 15・16 日

場 所：富士宮市内（富士川流域集落・芝川流域集落）、富士市北松野・木島

調査者：富士山文化課学芸員 3 名

内 容：富士川流域で行われているカワガンジイ・ナゲタイマツ・ヒャクハッタイ等特色ある盆行事について調査を行った。また、芝川流域でも同様の盆行事が行われており、これらについて調査を行った。



写真 15 ナゲタイマツ（富士市北松野）

ウ どんど焼き調査

日 時：平成 23 年 1 月 14・15 日

場 所：富士宮市内各所

調査者：富士山文化課学芸員 3 名

内 容：どんど焼きの習俗・内容、ヤナギの習俗等について調査を行った。市内では、1 月 14・15 日を中心にどんど焼きを行う集落が多い。どんど焼きは道祖神の祭として行われることが多く、また、どんど焼きの際に道祖神の前にヤナギと呼ばれる竹で作った飾り物を立てる集落もある。



写真 16 ヤナギ（上稲子）

エ 火伏念仏調査

日 時：平成 23 年 1 月 18 日

場 所：富士宮市内野

調査者：富士山文化課学芸員 2 名

内 容：富士宮市内野で毎年 1 月 18 日と 3 月 14 日に行われる「火伏念仏」（富士宮市指定民俗文化財）の調査を行った。火伏念仏とは、新築・改築の家を当家として、集落住民により構成される「六斎念仏衆」が念仏を唱え、火伏を祈願するものである。

Ⅲ 埋蔵文化財事業

1. 発掘調査（報告書作成）

代官屋敷遺跡発掘調査報告書の作成を平成 21 年度に引き続き行い、平成 22 年度に報告書を刊行した。

書 名：代官屋敷遺跡Ⅱ

発 行 日：平成 22 年 5 月 31 日

編集期間：富士宮市教育委員会

遺 跡 名：代官屋敷遺跡

所 在 地：富士宮市小泉字代官屋敷 2231-2 他

現地調査：平成 21 年 9 月 7 日～11 月 20 日

調査面積：900 m²

資料整理：平成 21 年 11 月 24 日～

平成 22 年 5 月 31 日

調査原因：宅地造成工事に伴う記録保存

主な時代：縄文時代早期～中期

主な遺構：集石・炉穴・土坑

主な遺物：縄文土器・石器

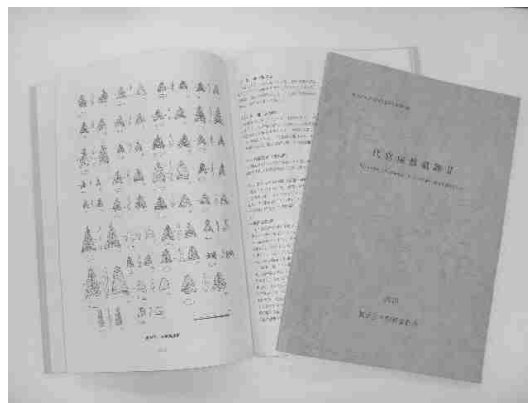


写真 17 発掘調査報告書『代官屋敷遺跡Ⅱ』

2. 試掘・確認調査

開発行為に伴う埋蔵文化財の試掘・確認調査を以下のとおり行った。

表 4 埋蔵文化財の試掘・確認調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	時代	主な遺構	主な遺物
1	浅間大社 遺跡	宮町 1-1	H23.5.18 ～ H23.5.22	6 m ²	なし	なし	なし
2	辻遺跡	下柚野 336-9 ほか	H23.6.15 ～ H23.6.18	21 m ²	縄文	土坑	縄文 土器
3	大室遺跡	小泉 1445-1 ほか	H23.7.1 ～ H23.7.2	39.5 m ²	なし	なし	なし
4	大鹿窪遺跡	大鹿窪 1555	H23.7.20 ～ H23.7.22	9 m ²	なし	なし	なし
5	村山浅間 神社遺跡	村山 1166-1	H23.9.21	1.44 m ²	なし	なし	なし
6	上谷戸遺跡	猪之頭 689-1	H23.9.22	1.2 m ²	なし	なし	なし
7	馬見塚遺跡	馬見塚 252-13	H23.10.14	1 m ²	なし	なし	なし

遺構・遺物が確認された調査は、以下の1件であった。

(1) 辻遺跡（下柚野）

所在地：富士宮市下柚野 336-9 ほか

調査面積：21 m²

調査期間：平成 22 年 6 月 15 日～

6 月 18 日

調査目的：駐車場舗装工事に伴う確認調査
《遺跡の位置》

辻遺跡は天子山地の東麓に位置し、東側を流れる芝川に向かって緩やかに傾斜する地形上にある。市内には字北山にも辻遺跡があるが、本調査対象の遺跡は芝川地域の字下柚野の遺跡である。芝川地域では唯一弥生時代の遺物が出土しており、縄文～古墳時代にかけて営まれた芝川地域を代表する遺跡である。

《調査の概要》

今回の調査は、柚野公民館の駐車場舗装工事に伴うもので、開発面積の約 650 m²を対象とし、1.5m×5mのトレンチを2本、1.5m×4mのトレンチを1本設定し、遺構・遺物の確認を行った。

《遺構・遺物》

縄文時代 遺構：土坑・溝・ピット

遺物：縄文土器・石器

《調査の成果》

調査の結果、トレンチ2から溝1条、トレンチ3から土坑1基、ピット9基が検出され、すべてのトレンチから縄文時代の遺物が出土した。遺構は、北側では浅く、南側では深い層から検出されている。遺物は縄文土器と石器で、縄文時代中期後半の曾利式土器が確認されている。隣接地で平成16年度に行われた発掘調査では縄文時代中期から後期の住居跡が確認されており、芝川に向かって緩やかに傾斜する地形上に、縄文時代の集落が展開していることが想定される結果となった。



図1 調査位置図 S=1/5000

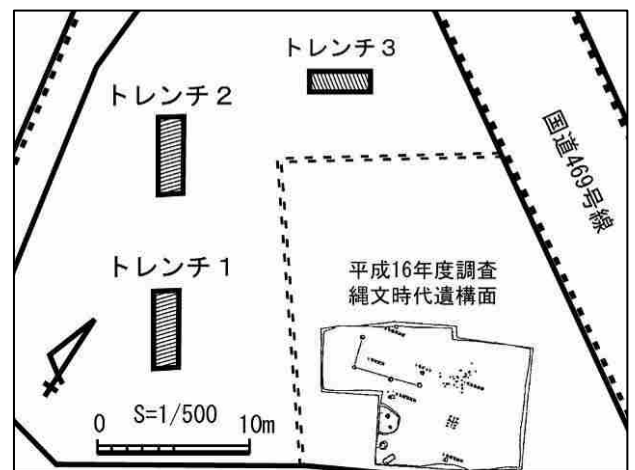


図2 トレンチ配置図

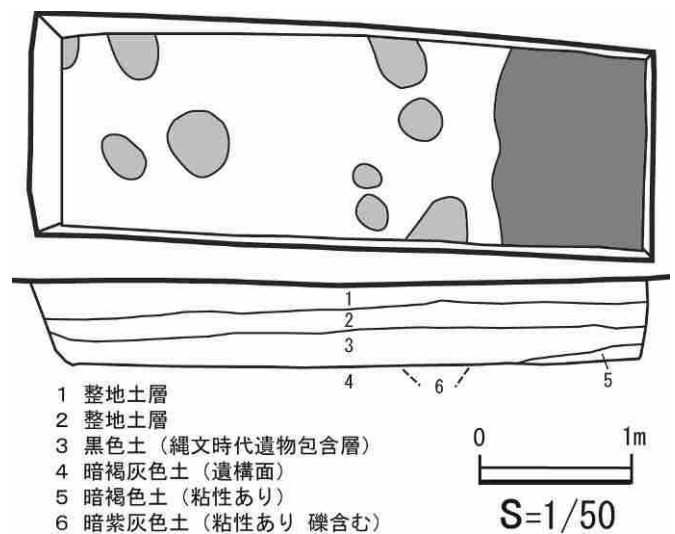


図3 遺構実測図（トレンチ3）

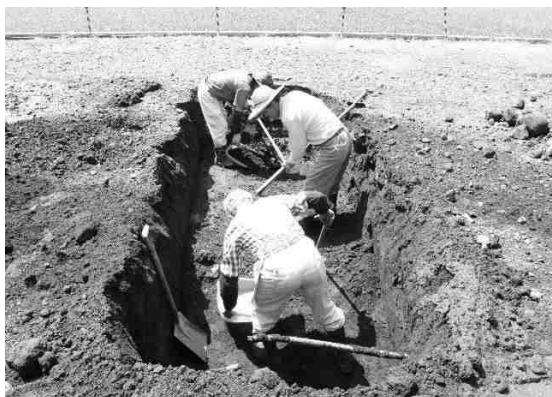


写真 18 調査風景



写真 19 出土遺物

3. 遺跡分布調査

芝川町との合併を機に、国・県の補助金を受けて、芝川地域を中心とした市内遺跡（埋蔵文化財）の分布調査を行った。

(1) 現地踏査

芝川地域を中心に現地を踏査し、遺跡の分布調査を行った。

期 間：平成 22 年 10 月 5 日～

平成 23 年 2 月 10 日（33 日間）

場 所：富士宮市全域（芝川地域中心）

調査員：富士山文化課学芸員 3 名

調査補助員 10 名

内 容：芝川地域で新たな遺跡を発見した。



写真 20 現地踏査

(2) 資料整理

現地踏査で得た資料の資料整理を行った。

期 間：平成 22 年 11 月 22 日～

平成 23 年 2 月 28 日（63 日間）

場 所：富士宮市役所文化財整理室

調査員：富士山文化課学芸員 3 名

整理作業員 2 名

内 容：現地踏査で得た土器等の洗浄・注記等を行った。



写真 21 洗浄・注記作業

4. 資料整理作業

平成 22 年度の確認調査で出土した資料と未整理の資料の整理作業を行った。

期 間：平成 23 年 3 月 1 日(火)～平成 23 年 3 月 31 日(木)

場 所：富士宮市文化財整理室

調査員：富士山文化課学芸員 1 名 整理作業員 2 名

内 容：土器等の洗浄・注記等を行った。

IV 郷土資料館事業

1 展示

(1) 常設展示

富士宮市民文化会館内一階に併設されている郷土資料館展示室で、富士山の信仰、富士山の動物、考古資料、富士の巻狩、角田桜岳、道祖神などの常設展示を行った。

(2) 企画展示

ア 「初代英国公使ラザフォード・オールコックによる外国人初の富士登山から 150 年展」

平成 22 年（2010）は、万延元年 7 月（1860.9）に初代英国公使ラザフォード・オールコック一行が外国人として初めて富士登山を行ってから 150 年目にあたり、これを記念して展示を行った。

期 間：平成 22 年 6 月 25 日(金)から 7 月 11 日(日)まで

場 所：富士宮市富士山環境交流プラザ 1 階展示室（富士宮市栗倉 1618-9）

内 容：オールコックの紹介、外国人の富士登山、オールコックの登山の概要、外国人を受け入れた地域の動き（地域資料から）、オールコックと熱海、登山の歴史と登山案内など。

協 力：富士山を世界文化遺産にする熱海の会

その他：見学者数 874 人。

併せて、同施設工作室において 6 月 25 日(金)から 7 月 8 日(木)まで「富士山世界文化遺産パネル展」を開催した。

イ 「合併記念写真展」

富士宮市と芝川町の合併を記念して、旧富士宮市域 20 点・旧芝川町域 22 点の新旧比較写真展示を行った。

期 間：平成 22 年 11 月 13 日(土)から平成 23 年 3 月 27 日(日)まで

場 所：富士宮市民文化会館内郷土資料館展示室

ウ 「和紙とともに生きた後藤清吉郎展」 展示協力

主 催：富士宮市富士山環境交流プラザ

期 間：平成 22 年 8 月 21 日(土)から 9 月 6 日(月)まで

場 所：富士宮市富士山環境交流プラザ 1 階展示室

内 容：郷土資料館所蔵資料の貸出

2 講演会

(1) オールコック富士登山 150 年記念講演会

演 題：「幕末外国人富士登山と新時代の幕開け」

日 時：平成 22 年 9 月 11 日(土)

場 所：富士宮市立富士根北公民館（富士宮市栗倉 347-1）

講 師：若林和司氏（富士宮市郷土史同好会会長）

内 容：万延元年（1860）のオールコックを初めとする、幕末期の外国人による富士山が、地域に、そして明治維新を迎える日本に与えた影響について講演した。

3 資料収集・保存管理

(1) 資料収集

ア 郷土資料収集

平成 22 年 6 月 9 日 民俗資料 60 点 個人寄贈

平成 23 年 1 月 18 日 古文書資料 4 点 個人寄贈

平成 23 年 3 月 2 日 民俗資料 69 点 個人寄贈

(2) 保存管理

ア 収蔵品くん蒸事業

日 時：平成 22 年 9 月 27 日(月)から 9 月 29 日(水)まで

場 所：移動燻蒸車 12 m³

豊町収蔵庫（富士宮市豊町 18-8） 約 800 m³

柚野収蔵庫（富士宮市下柚野 361-1） 約 300 m³

内房収蔵庫（富士宮市内房 3903-1） 約 1,000 m³

内 容：移動燻蒸車を使用して薬品名エキヒューム S による殺虫・殺カビ燻蒸を実施した。収蔵庫内は薬品名ブンガノンによる殺虫燻蒸を実施した。

施工業者：中部資材株式会社静岡営業所（浜松市東区篠ヶ瀬町 72 番地）

イ 収蔵品整理事業

事業名：緊急雇用創出事業「文化財調査・整理・保存事業」（臨時職員 2 名雇用）

期 間：平成 22 年 9 月 1 日から平成 23 年 2 月 28 日まで

内 容：①郷土資料館所蔵の古文書資料約 25,000 点の写真撮影

②旧芝川町内房資料館及び柚野資料館収蔵資料約 1,000 点の整理

4 古文書等解説刊行事業

(1) 上井出財産区有文書

上井出財産区有文書（現在郷土資料館寄託資料）は、静岡・山梨両県の国境論争や、富士山麓・朝霧高原の入会地論争に関わる資料等があり、当時の富士宮市北部地域の様子について知ることのできる貴重なものである。本年度は、80 点の解説が終了した。これらの文書・絵図は平成 23 年度に解説を加えて報告書を刊行する予定である。

5 その他

(1) 後藤清吉郎資料館協力

後藤清吉郎資料館運営サポーターの会世話人会出席。

館内の展示や世話人会の活動に協力。

(2) 郷土資料館通信の発信

郷土資料館学芸員が、郷土資料館の展示会や市内の遺跡・史跡・文化財などについて解説した原稿を、郷土資料館ホームページに掲載した。

(3) 調査協力

滋賀県蒲生郡日野町町史編纂室調査協力（平成 22 年 10 月 26 日、近江商人関連調査）

V 歩く博物館事業

1 探索会

(1) 市主催探索会

第1回

日 時：平成 22 年 9 月 11 日(土)

場 所：富士根北地区「道者道を歩くコース」

講 師：富士山文化課職員

参加者：8 名

第2回

日 時：平成 22 年 11 月 10 日(水)

場 所：西山・大鹿窪地区 仮称「西山本門寺と大鹿窪遺跡をめぐるコース」

講 師：芦沢幹雄(歩く博物館解説員)

参加者：40 名

第3回

日 時：平成 23 年 2 月 26 日(土)

場 所：上稲子地区 仮称「平家落人伝
説の里をめぐるコース」

講 師：渡井正二(歩く博物館解説員)

参加者：79 名



写真 22 探索会（上稲子地区）

(2) 探索会講師派遣

平成 22 年 10 月 5 日(火) 市立富士見小学校家庭教育学級主催探索会

平成 22 年 10 月 24 日(日) 山宮区主催探索会

平成 23 年 3 月 6 日(日) 市立西小学校 PTA 主催探索会

2 コース策定事業

(1) 現地踏査

芝川地区に新設する 5 コース（柚野地区、西山地区、羽鮒・長貫地区、内房地区、上稲子地区）の現地踏査を行った。

(2) 検討会開催

日 時：平成 22 年 9 月 8 日(水)

場 所：芝川公民館

出席者：歩く博物館解説員 4 名

内 容：芝川地域に仮設定した 5 コースについての検討を行った。

(3) 芝川地区検討コース案

現地踏査に基づきコース案を作成し検討会で協議した結果、下記の 5 コースの案を策定した。これらのコースは、平成 22・23 年度に市主催の探索会を開催し、平成 24 年度に修正を加え、平成 25・26 年度に現地の案内板とガイドブック・パンフレットを作成する予定である。

ア 西山・大鹿窪地区（平成 22 年 11 月 10 日(水)探索会実施、資料 iii 参照）

仮称「西山本門寺と大鹿窪遺跡を訪ねる」コース 距離約 6 km、徒歩約 3 時間

〈芝川スポーツ広場駐車場〉 → 1.黒門 → 2.参道 → 3.鐘楼 → 4.本堂 → 5.ヒイラギと首塚 → 6.中門跡 → 7.三堂跡 → 8.歴代住職の墓 → 9.道祖神 → 10.甲子 → 11.福石神社 → 12.大鹿窪遺跡 → 13.小森八幡宮 → 14.窪尼御前の堂 → 〈芝川スポーツ広場駐車場〉

イ 上稲子地区（平成 23 年 2 月 26 日(土)探索会実施、資料 iv 参照）

仮称「平家落人伝説の里を歩く」コース 距離約 5 km、徒歩約 3 時間

〈ユー・トリオ駐車場〉 → 1.平維盛の墓 → 2.浄泉寺跡 → 3.山ノ神社 → 4.平家落人伝説と地名（枇杷窪） → 5.六地藏石幢 → 6.稲荷神社 → 7.宮地橋・稲子川 → 8.上稲子八幡宮・城山 → 9.道祖神 → 10.身延道（桜峠・石神峠） → 〈ユー・トリオ駐車場〉

ウ 内房地区（平成 23 年度探索会実施）

仮称「内房の里を訪ねる」コース 距離約 5 km、徒歩約 3 時間

〈芝川公民館内房分館駐車場〉 → 1.祥禅寺 → 2.廻沢川 → 3.馬頭観音 → 4.龍興寺 → 5.相沼浅間神社 → 6.白鳥山 → 7.本成寺 → 8.首塚（胴塚） → 9.富士川流域の民俗行事 → 〈芝川公民館内房分館駐車場〉

エ 長貫・羽鮒地区（平成 23 年度探索会実施）

仮称「富士川と長貫・羽鮒地区を訪ねる」コース 距離約 5 km、徒歩約 3 時間

〈芝川会館駐車場〉 → 1.舩島新田 → 2.子安さん・おでこ道祖神 → 3.平野氏神社（八幡・山王） → 4.いかだ師の道（身延道）と道しるべ → 5.題目塔 → 6.妙興寺と爪引曼荼羅 → 7.長貫発電所 → 8.釜口峡 → 〈芝川会館駐車場〉

オ 柚野地区（平成 24 年度探索会実施予定）

仮称「柚野の里を歩く」コース 距離約 5 km、徒歩約 3 時間

〈柚野公民館駐車場〉 → 1.諏訪・八坂・山神社 → 2.蚕神 → 3.道祖神・題目塔（道しるべ） → 4.正法寺 → 5.土井の川（三区用水） → 6.延命寺 → 7.庚申塔・馬頭観音 → 8.大堀用水取水口（燕堰） → 9.猫沢のカシワ → 10.蚕神・祝言道祖神 → 11.猫石 → 12.題目塔・聖徳太子碑・芝瀬川天神 → 13.水神碑・道祖神 → 14.芝川ポットホール → 〈柚野公民館駐車場〉

VI その他の事業

1 問合せ対応

富士宮市の歴史や民俗などに関する、市内外からの問い合わせ 73 件に対応した。

2 小中学校総合学習への対応

市内小中学校の総合学習（富士山学習）の一環として、児童・生徒の訪問に対応した。
また、各学校を訪問し講話を行った。

3 富士山まちづくり出前講座

富士山文化課職員が講師となり、小中学校・公民館等に出向き、郷土の歴史などを紹介する講座を開催した。

表 5 平成 22 年度出前講座実施一覧

場所	対象	実施日	内容
富丘小学校	児童	平成 22 年 5 月 13 日(木)	「大昔の富丘小学校周辺」
第三中学校	生徒	平成 22 年 6 月 29 日(火)	地域の遺跡、深沢安兵衛の道しるべ
富士丘区民館	高齢者学級	平成 22 年 7 月 8 日(木)	地域の歴史について
富丘公民館・和田公会堂・大中里区民館・淀師区民館・淀橋区民館・宮原区民館	高齢者学級	平成 22 年 9 月 7 日(火)・9 日(木)・15 日(水)・24 日(金)・28 日(火)、平成 23 年 2 月 9 日(水)	「富丘の原始・古代」
芝川中学校	生徒	平成 22 年 10 月 13 日(水)	西山本門寺・富士川の歴史等
大富士中学校	生徒	平成 23 年 2 月 15 日(火)	富士山信仰



写真 23 出前講座（富丘公民館）



写真 24 出前講座（市立第三中学校）

資料 i 旧芝川町指定文化財調査報告

1 上稲子八幡宮の厨子（調査者：建部恭宣*1 調査日：平成 22 年 10 月 27 日）

(1) 概要

三間社、入母屋造り、平入り、正面軒唐破風及び千鳥破風付き。擬宝珠高欄の基壇上に建ち、両脇に脇障子を付す。奥行き一間で、その背面部分を略す。

柱は円柱、頭貫・台輪を載せて、二手先斗拱を詰組とする。禅宗様式を基調として、和様を折衷する。全体的に、漆塗り・金箔押し・彩色を施し、飾り金具を打つ。

(2) 沿革

製作時期に関する明確な史料はない。一説には、嘉永 2 年(1849)に京都より購入したとも、安政 4 年(1857)に搬入されたものとも伝えられている。

昭和 53 年に旧芝川町の有形文化財に指定されたが、平成 3 年頃より朽損が進み崩壊寸前であったので、同年秋より修復を始め、翌 4 年 7 月に遷座を行なった。

(3) 評価

建築様式の外見所見からは、江戸時代末の特徴を示すものと判断される。細部に至るまで精巧に製作されており、建築様式も統一され時代性を良く保った作品である。

(*1 建部恭宣：富士宮市文化財保護審議会委員)



写真 1 上稲子八幡宮の厨子

2 龍興寺の厨子（調査者：建部恭宣 調査日：平成 22 年 10 月 27 日）

(1) 概要

方一間、宝形造り、板屋根。柱は円柱、土台の上に立ち、内法長押を廻す。柱上に和様の三つ斗組物を載せ、中備に撥束を置く。柱頂部に頭貫を通し、端部は拳鼻となる。正面に両開きの舞良戸を建てる。内部両端に円柱を立てて、虹梁・組物を構えて内陣扱いとする。

(2) 沿革

本厨子は、『芝川町誌 追補』によると、「室町初期のものと推定され、」と記される。しかし、それを裏付ける直接的な史料は示されておらず、明確ではない。

昭和 58 年に、旧芝川町の有形文化財に指定された。その際の調査報告書によると、本寺は、興津清見寺四世説心和尚が隠居寺として、慶長 13 年(1608)に開山した。開山にあたり、本尊と共にこの厨子を持ってきたらしい、とある。



写真 2 龍興寺の厨子

(3) 評価

ケヤキの素木造りで、装飾も殆んど無く簡素な造りであるが、和様を基調として全体的によくまとめられている。正面の頭貫や木鼻、さらに内部の虹梁に施された渦・若葉等の絵様彫刻は線が細く、彫りも浅い。また曲線が流れるように穏やかで優美である。これらの特徴は、室町末期から江戸初期にかけて見られるものである。

したがって、慶長 13 年に隠居寺としてこの寺を創建した際に、新たにこの厨子が造られて持参したものではないか、という判断も可能である。

3 芭蕉天満宮本殿（調査者：建部恭宣 既調査）

(1) 概要

一間社、流造り、銅板葺き。ケヤキ素木造り。正面軒唐破風及び千鳥破風付き。身舎正面一間、背面二間、奥行二間、円柱。向拝一間、方柱、木階五級、浜床付き。身舎は中央柱筋で内陣・外陣に分かれ、正面に双折板唐戸を建てる。軒は二手出て丸桁を支え、二軒、繁垂木。

向拝廻りに彫刻が集中。水引虹梁と蟄股が一体となっており、彫刻は正面が鳳凰、背面は麒麟。木鼻の彫刻は獅子に造り、左側の獅子は籠彫りの鞠を抱えるが鞠は足の上に載る。

身舎の縁は未完であるが、両側面及び背面に一段低い廻縁を取り付ける計画であった。

(2) 沿革

棟札類が発見され、以下のことが判明した。明治 11 年(1878)11 月頃、本殿を建立するための木材を山から伐り出したようである。杣(樵、きこり)を率いたのは、「望月重五郎」という棟梁であった。その後、造営は順調に進んだと考えられ、明治 13 年(1880)11 月 28 日には、「落成棟上ケ」が執り行なわれた。棟札によると、「匠長(たくみのおさ)」は由比宿に住む「柳室半兵衛」であった。2 ヶ月後の明治 14 年(1881)の正月には、屋根工事も無事に完成している。

(3) 評価

棟札によって、建立年代が判明した。造営に携わった大工は、由比住の柳室半兵衛を棟梁とする一派であった。

建築彫刻に関しては、三嶋大社の造営に関わった後藤芳治郎や小沢半兵衛・希道の参画が伝えられている。しかし、これを証する明確な史料類はなく詳らかでないが、彫刻の意匠や技法などからは、全くこれを否定できるものではない。

身舎廻りの縁やその他の部分において、未完のまま工事を打ち切った痕跡が認められるが、そのために建造物の持つ歴史的・建築的な価値をなんら低めるものではないことは明らかである。



写真 3 芭蕉天満宮本殿の彫刻

4 木造願満祖師坐像（調査者：高橋晶子*2 調査日：平成 22 年 10 月 15 日）

(1) 品質・構造

寄木造。玉眼。頭部は前後 2 材。体幹部は前後 2 材で、像底を彫り残して内削りを施す。両肩、手首で別材を寄せる。膝前は 2 材。腰に三角材を寄せる。底面布張り。

彩色は胡粉か白土を下地とする。横被に盛り上げ彩色で牡丹紋を施す。

(2) 形状

壮年期の日蓮の坐像。頭部は、日蓮に特徴的な肉付きのよい顔で、鼻の穴を表す。

僧綱衣に袈裟を着け、横被を右肩から懸けまわす。持物は後補と思われるが、左手に法華経を持ち、右手に笏を持つ。

普段は彫刻の着衣の上から実物の法衣と袈裟を着ている。

(3) 年代など

面部は丸い輪郭、明るい表情で江戸時代の親しみを感じる。体部はあまり奥行きがなく、衣文の表現も重厚さがない。頭部とのバランスがよく、江戸時代の制作と考えられる。

本像には繊細な盛上げ彩色の文様が施され、造形は丁寧で全体のバランスがよい。江戸時代の彫刻の優作である。

法量 (cm)

総 高	
像 高	32.4
髪際高	
頂一顎	9.8
面 長	
面 幅	6.9
面 奥	9.0
耳 張	8.6
胸 奥	右 11.6
腹 奥	13.0
肘 張	26.1
膝 張	25.5
膝高 (左)	7.1
(右)	6.4
坐 奥	22.0
裳先出	2.8
裾 張	38.1 (最大幅)
足先開	
台 座	
光 背	



写真 4 木造願満祖師坐像

(*2 高橋晶子：富士吉田市歴史民俗博物館学芸員)

5 木造韋駄天立像（調査者：高橋晶子 調査日：平成 22 年 10 月 22 日）

(1) 品質・構造

寄木造。玉眼。頭部は前後 2 材とするか、耳前で面矧ぎ。衿際までの肉身部で挿し首とする。兜の左右の側面に別材を寄せる。体幹部は 1 材とし、背面の腰部に長方形に穴をあけ、内部を内割りする。内部にはノミ跡が残る。両肩、肘、手首で矧ぐ。両手先は後補作。袖先の遊離部は別材を寄せる。右の裾先を欠失する。下半身は腰の左右の側面に別材を寄せる。足は 3 材とし、足裏のホゾは彫出か。

彩色は下地に薄く白土か胡粉を塗り、その上に黒色で仕上げる。甲冑の縁取り、靴の縁などには金箔を施す。胎内に胎内仏をいれる。

(2) 形状

韋駄天は禅宗寺院の庫裏に安置される。童顔で中国風の甲冑をまとい、岩座上につきたてた宝棒に両手を重ねる。本像も通例通りの韋駄天である。胎内仏はやはり甲冑をつけた姿であるが、憤怒相や、持物をもつ手の動きが韋駄天とは異なる。神将形の神像か。

(3) 年代

韋駄天は古くは鎌倉時代から作例があるが、多くは江戸時代以降の作例であり、中世に遡る遺品は極めて少ない。初期の作例は京都・泉涌寺像や岐阜の長瀧寺像など中国の宋から将来されたものが多く、その着衣の表現は非常に細やかで彩色も丁寧である。鎌倉時代末の作では山口県の功山寺の韋駄天像があり、嘉暦 2 年（1327）頃の作品とされ、のっぺりした平板な顔立ちで、風に翻る衣の表現などに鎌倉時代の生気を感じる。本像をみると、面部はすっきりとした目鼻を刻み表情は明るい。また、着衣が単純化されて硬い表現である点などから、江戸時代の制作と思われる。韋駄天像としては大きく、造形的にもしっかりとしており、堂々とした美しい彫像である。なお、胎内仏は大きな頭部のバランスから室町時代に遡る可能性がある。

(4) 備考

前述の通り、韋駄天像の作例の多くは江戸時代のものである。中世の作例は非常に数が少ないため、様式論などはあまり進んでおらず、江戸時代制作と思われる本例も定位置を定めがたい。なお、江戸期のものでは寛文 3 年（1663）～4 年制作の京都府宇治市万福寺の像が著名

法量（cm）

総 高	
像 高	59.8
髪際高	54.3
頂一顎	13.8
面 長	7.3
面 幅	6.6
面 奥	
耳 張	
胸 奥	右 10.7
腹 奥	12.0
肘 張	22.1
膝 張	
膝高（左）	
（右）	
坐 奥	
裳先出	
裾 張	23.0
足先開	外 19.7 内 14.0
台 座	最大 奥 29.0 幅 40.8 高 17.7
光 背	高さ 90.5



写真 5 木造韋駄天立像

であるが、無指定となっている。関東一円でも江戸期の彫像は通例、彫刻資料全体の 9 割を占め、制作年代からの希少性は低い。市として指定を考える場合は、さらに市内仏像の悉皆調査などを経て評価を定める必要がある。

6 木造金剛目地蔵菩薩立像（調査者：高橋晶子：平成 22 年 10 月 7 日）

(1) 品質・構造

木造。寄木造。彩色。玉眼。白毫に水晶を嵌入。

頭部は前後四材矧ぎ。補修で首が固定され詳細は不明であるが、古い写真資料によると頭部の材と正面肉身部を共木で造り、衣衿際で肘部に差し込む。体部は前後二材か。側面は両肩、両肘で矧ぐ。左腕の肘より先は後補。像底部には別材をはめ込み、そこから両足、足柄を彫出している。両足先は後補で、柄にのせる形で別材を寄せる。

彩色は黒漆塗りの下地に施す。右手前膊部に白い彩色が残り、肉身部は白く塗られたと思われる。

袈裟の表には金箔で切金風に牡丹唐草文様が表され、覆肩衣の袖の縁に沿って金箔で文様が表される。裾の裾にも太い金が一条描かれる。玉眼は瞳を黒であらわし朱で縁取る。

持物、台座、光背は後補。

(2) 形状

円頂。白毫相を表す。内衣、裾、覆肩衣、袈裟をつける。内衣は胸前を斜めに覆う。覆肩衣は背部から右肩にかかり、袈裟にたくしこまれる。袈裟は左肩から背部をまわり、右腋下を通して正面にまわり、左肩にかかる。

両手を屈臂し、左手は掌を上に向き、すべての指を曲げて宝珠を持つ。右手は掌を内側に向けてすべての指をまげ、錫杖を持つ。両足はそろえて先を外に向かって開いて立つ。

(3) 年代

「芝川町の文化財」によると建保 3 年（1215）10 月 22 日の作と記され、昭和 58 年の文化財審議会の報告書では胎内にこの年記が記されていたとされる。

この頃は慶派仏師が台頭し、運慶・快慶の制作盛期である。本像の表現には鎌倉時代の特色である自然さと現実感がみられるが、やや体軀が細身で量感が少なく、衣文の表現は彫りが浅く、運慶・快慶の作品の力強さに比べると表現が形式的である。さらに、木寄せが細かい構造、線の太い切金の表現などから、建保 3 年よりは下った鎌倉時代後期の作と考えられる。

頭部の銘文によると、本像は後世、七条仏師原田兵部祐円によって修理されている。七条仏師は京都の七条に住した仏師の集団で、慶派の流れをくみ鎌倉時代から江戸時代まで活躍した。

法量 (cm)

総 高	69.4
像 高	51.1
髪際高	なし
頂—顎	8.1
面 長	7.2
面 幅	5.1
面 奥	7.2
耳 張	6.6
胸 奥	(右) 7.1
腹 奥	9.2
肘 張	16.2
膝 張	
膝高(左)	
(右)	
坐 奥	
裳先出	
裾 張	11.1
足先開	外 8.8 内 4.9
台 座	31.0×25.9×18.3 新造
光 背	新造

(4) 銘文（昭和 57 年の写真より）

《首柄部平面部》

「奉再造

金剛目地蔵

七条大仏師

定朝法印

末流原田

兵部卿祐円」

《首柄側面》

「寛□□□乙亥

八月□□」



写真 6 木造金剛目地蔵菩薩立像

7 木造阿弥陀三尊像（調査者：高橋晶子：平成 22 年 10 月 15 日）

【阿弥陀如来坐像】

(1) 品質・構造

表面の金箔が厚く、詳細は不明だが、一木割矧造あるいは寄木造。彫眼。頭体幹部を通して前後二材。内削りを施す。肉髻を含めた後頭部には別材をはめ込んでいるが、当初のものかどうかは不明である。像底部には後世の底板をはめる。両肩以下、手首先で別材を寄せる。膝前には二材を寄せる。白毫には水晶を嵌入するか。螺髪は切付、耳朶は環状を呈し、三道を彫出する。肉身、衣は漆箔とし、頭髮は古色とする。

(2) 形状

第一指と第二指を捻じ右手を上げ、左手を垂らす来迎印を結ぶ阿弥陀如来の坐像。右足を上にして結跏趺坐する。極楽浄土から死者を向かえにくるいわゆる来迎の阿弥陀の形である。

来迎の阿弥陀は平安後期の浄土信仰の高まりとともに盛んに作られるようになった。多くは三尊形式で、向かって右に蓮華を持つ観音菩薩を、左に合掌する勢至菩薩を配する。しかし、現状の両脇侍の制作年代は中尊をさかのぼり、当初の一具ではないと思われる。

(3) 年代

浅く穏やかな衣文。薄い側面感。丸く柔和な相貌は天喜元年（1053）製作の平等院鳳凰堂の阿弥陀如来坐像以降、11世紀後半～12世紀に多く作られた定朝様の阿弥陀坐像に通ずる。木寄せの構造は頭体幹部を前 2 材、後 2 材とする定朝の大掛かりなものとは異なり、定朝様も形式化した感があるので時代は多少下るものと思われる。平安時代末・12 世紀後半頃の定朝様の阿弥陀坐像と思われる。古作とし貴重である。

法量（cm）

総 高	
像 高	87.4
髪際高	76.9
頂一顎	28.2
面 長	15.8
面 幅	17.3
面 奥	21.2
耳 張	21.6
胸 奥	右 23.2
腹 奥	25.4
肘 張	53.4
膝 張	69.4
膝高（左）	11.7
（右）	11.8
坐 奥	
裳先出	
裾 張	
足先開	
台 座	
光 背	

(4) 銘文

《台座上盤裏面銘文》（修理銘）

「 願主権大僧都大越家法印養達
光明山西念寺三尊如来大破造立 奉加禪妙心沙門定林山天笠寺沢印和尚
同門中 残夢老
本願施主 望月九左衛門
同 次右衛門
同 次太夫
慶安三年庚寅六月十五日々々 奉加施主本願富士郡須津
大仏師 金股半兵衛
僖道 」

【観音菩薩立像】

(1) 品質・構造

頭体幹部を通して一木造。彫眼。後世の彩色が厚く、詳細は不明だが、その重量からみて内割りはないものと思われる。右は肩以下、左は肩以下と肘で別材を寄せる。足先、ホゾは別材。ホゾは底面に両端と中央に3箇所あり、鉄釘でとめている。両肩以下は後補か。持物は後補。

(2) 形状

蓮台を持って立つ観音菩薩。頭部は単髻で天冠台を彫出し正面に板状の装飾部を表す。耳朶は貫通しない。上半身に条帛を着け、下半身に裳を着ける。腰前に二段に天衣を廻らす。右手は垂下し、掌を上にしてすべての指を伸ばす。左手は屈臂し、掌を上にして蓮台を持つ。

(3) 年代

一木造・内割りのない構造で、肩以下を別材としている点は、中尊とは構造が異なり、古様である。一木造で像底にホゾを設ける形や、腹部が出て背中が沿った側面感、平たく厚い耳と前髪際から耳前にかけての簡略化された髪表現は、山梨県では南アルプス市の長谷寺十一面観音菩薩立像や、山梨市永昌院の十一面観音立像など10～11世紀にかけての立像にみられる。ただし、本像の膝前の衣文は丸みを帯びて浅く、前掲の2像より和様化が進んでいるところを見るとやや下った年代、11世紀末～12世紀初め頃の制作ではないかと考えられる。

(4) 備考

大きさ、作風、構造が似ていることから、本像は勢至菩薩立像と同時期で一具の制作と思われる。肩以下が後世の補作とすると、当初から観音であったかどうかは不明。別の中尊の脇侍であったものを現状の中尊に合わせたと思われる。

法量 (cm)

総 高	
像 高	99.5
髪際高	88.5
頂一顎	22.7
面 長	11.0
面 幅	8.4
面 奥	11.2
耳 張	12.2
胸 奥	右 12.0
腹 奥	13.2
肘 張	22.6
膝 張	
膝高 (左)	
(右)	
坐 奥	
裳先出	
裾 張	21.8
足先開	外 10.1 内 2.5
台 座	高 28.8 幅 37.5 奥 30.5
光 背	

【勢至菩薩立像】

(1) 品質・構造

頭体幹部を通して一木造。彫眼。後世の彩色が厚く、詳細は不明だが、その重量からみて内割りはないものと思われる。両肩、両手首で矧ぐ。足先、ホゾは別材。ホゾは底面に両端と中央に3箇所あり、鉄釘でとめている。両肩以下は後補か。

(2) 形状

合掌する勢至菩薩。頭部は単髻で天冠台を彫出し正面に板状の装飾部を表す。耳朶は貫通しない。上半身に条帛を着け、下半身に裳を着ける。腰前に二段に天衣を廻らす。両手は屈臂し、腹前で掌を合わせる。

(3) 年代

観音菩薩立像と同じく一木造・内割りのない構造で、肩以下を別材としている。中尊より古様である。一木造で像底にホゾを設ける形や、腹部が出て背中が沿った側面感、平たく厚い耳と前髪際から耳前にかけての簡略化された髪表現は、10～11世紀にかけての立像にみられる。ただ、本像の膝前の衣文は丸みを帯びて浅く、和様化が進んでいる。したがって本像は多少下った11世紀末～12世紀初め頃の制作ではないかと考えられる。

(4) 備考

大きさ、作風、構造が似ていることから、本像は観音菩薩立像と同時期の制作と思われる。肩以下が後世の補作とすると、当初から勢至菩薩であったかは不明。やはり、違う中尊の脇侍であったものを、現状の中尊に合わせたと思われる。

法量 (cm)

総 高	
像 高	97.0
髪際高	86.8
頂一顎	20.6
面 長	10.1
面 幅	9.2
面 奥	12.1
耳 張	11.8
胸 奥	右 11.0
腹 奥	13.0
肘 張	33.1
膝 張	
膝高 (左)	
(右)	
坐 奥	
裳先出	
裾 張	24.0
足先開	外 11.1 内 4.0
台 座	高 27.5 幅 38.5 奥 31
光 背	



写真 7 木造阿弥陀三尊像

8 阿弥陀観音勢至の軸（調査者：日比野秀男*3 調査日：平成22年11月29日）

(1) 調査事項

室町時代、掛幅装、縦68.5cm、横27.8cm。（内寸 縦55.5cm、横25.8cm）

縦長の画面に阿弥陀三尊を表す。阿弥陀如来は二重円光を負い、来迎印を結んで雲上に立つ。観音菩薩と勢至菩薩は阿弥陀の前方に侍立する。二尊共刺繍で表わされた雲上に立ち、観音はやや腰をかがめている。地はやや緑がかかった色の糸で刺繍し、三尊の金色の刺繍によく映えている。細部の刺繍の技術はさまざまで雲や蓮台の表現がたくみである。阿弥陀の螺髪、袈裟、菩薩の垂髪など黒色を呈しており、髪の毛を刺繍しているかもしれない。ほかの阿弥陀三尊来迎図にはそのような例が多い。

本地の四周は蓮華唐草を刺繍で表している。

(2) 調査結果

ア 解説

刺繍で表現された仏像を一般的に繡仏と呼んでおり、古くは中将姫が織ったと伝える奈良時代の当麻寺（奈良県）の阿弥陀変相図が有名で多くの繡仏については中将姫が織ったと伝える。その他、繡仏の作例は阿弥陀三尊来迎図が多く、阿弥陀信仰の流布とともに鎌倉時代以降多く制作されている。しかしながら鎌倉時代までさかのぼるものは少なく一般的には室町時代以降のものが多く、本図も室町時代の制作と考えられる。

イ 伝来等

延命寺の伝来によると中将姫の制作と伝えるが制作時代としてはそこまでさかのぼることは困難である。なお、刺繍で制作された仏画は静岡県内には「刺繍不動明王二童子像」（重要文化財、浜松市美術館蔵）、他には県指定になっている「刺繍釈迦三尊図」（修禅寺、中国・明時代）がある。

ウ 保存状況

刺繍の糸もほつれている部分が多く全体としては傷みが進んでいる。

エ 今後の保存対策および指定の可否

今後においては、本作の制作時代の古さ、作品としての出来の良さ、作例も少なく貴重であることなどから市の指定などの措置を講じて保存について留意されることが望まれる。



写真 8 阿弥陀観音勢至の軸

（*3 日比野秀男：常葉学園大学造形学部長）

9 西山本門寺梵鐘（調査者：高野穂多果*4 調査日：平成 22 年 11 月 15 日）

(1) 梵鐘の概要

鐘の大きさは、江戸時代の梵鐘の中ではやや大ぶりである(※1)。鐘身の口径に対する比は 186.3%で、江戸時代の平均値をはるかに超えて丈高であるが、乳の間から撞座にかけて緩やかに膨らんでいるためか、あまり細身には感じない。形態は優美で、破損したため鐘楼から降ろしたとのことであるが、一見したところ傷や破損部位は見受けられず、保存状況は極めて良好のように見える。竜頭は、中央に宝珠をもつ両頭式。やや横張りの雫形の宝珠は周囲に火炎が施されており、竜の上に直接配される。竜の額には角が 4 本(内、真ん中の 2 本が大きい)のびる。笠形からのびる円柱を浅く噛む上唇部分は、嘴状には突き出すが、噛むというよりはむしろくわえているように見受けられる。作りは精巧であるが、迫力はなく力強さを感じない。通常、笠形の下にくるはずの上帯は、省略されていて存在しない。下帯には唐草文が鋳出されている。乳は茸形で、1 区内 6 段 6 列計 144 個が配されている。撞座は鐘身高に対し 27.3%で、平均より高い位置につく。文様は十六葉単弁であるが、八葉複弁を意識しているのか、花卉 2 枚おきに間弁が配されている。八花形の中房の内側には 1 本の輪郭線が刻まれ、中央に 1 顆、周囲に 8 顆、計 9 顆の蓮子が円で表現され、周囲の 8 顆からは中央の 1 顆にむけて直線が刻まれる。また、中房の周囲には、雄蕊がやや大きめな珠文と細かい直線によって表現されている。竜頭との関係は新式である。駒の爪は張り出しが弱い。

銘文は池の間第 1 区から第 4 区の全てに陰刻で施されている。同時代の梵鐘に比べ、各区とも非常に簡潔である。文字は鑿の手法が闊達で、非常に整ったきれいな字形である。鋳物師は江戸に住む尾崎長兵衛であるが、彼の名は同寺で所蔵する磬に同名があるのみで、『諸国鋳物師名寄記』、『諸国鋳物師姓名記』、『諸国鋳物師控帳』、『禁裏諸司真継家名寄牒写』、『由緒鋳物師人名録』、『江戸鋳師名譜』などをはじめとする諸文献や現存する東京都、神奈川県、埼玉県の鐘にその名が出てくることはない。

また、江戸時代の平均的基準から逸脱している規格、竜頭、撞座、乳、袈裟襷をはじめとする各特徴や全体のプロポーシオンなどをみても、同様の特長を有する鐘は東京都内の現存鐘には存在せず、同姓の鋳物師も存在しないことから、鋳物師の系譜を推測することも困難である。江戸に鋳物師が居住するようになったのは、江戸幕府開府後間もなくのことで、下野天明をはじめ京都など各地から鋳物師が移り住んできている。精巧で丁寧に作られてはいるものの、江戸時代の平均的基準から逸脱した本鐘は、天明や京都、近江などの有名出身鋳物師の作とは考えにくいため、長兵衛は地方から江戸に移り住んだ鋳物師の一人であると思われる。

保管者	高				口径	厚	乳		上帯	下帯	撞座		撞座と竜頭の関係	口径に対する鐘身高の比	鐘身高に対する撞座高の比	口径に対する厚さの比
	鐘身	笠形	竜頭	計			段	列			数	鐘下端から中心までの高さ				
	A	B	C	H	D	T						P		A/D	P/A	T/D
西山本門寺	102.5	9	27.5	139	74.6	不明	6	6	—	唐	2	28	新	186.3	27.3	不明
江戸時代平均値					65 前後									132.3	23.4	10.5

*比率以外の単位は「cm」

※1 江戸時代の梵鐘の平均口径は 65cm 前後と言われている。また、現存鐘の一部(454 口)と供出の際の資料(三菱工業株式会社直島製錬所と三井鉱山株式会社日比製錬所に受け入れた 11,141 口、約 11 県分の供出資料)より、有徳の分限者の多い地方の鐘は平均 79cm、零細農民の多い地方の鐘は 63cm と小さかったことが解っている。

(2) 梵鐘の主な特長

ア 江戸時代の平均的規格から外れている。

- ・平均より大きく、細長い。(平安時代後期の平均値に近い)
- ・撞座の位置が高い。(平安時代後期の平均値に近い)
- ・乳の数、撞座の蓮華文の子房の数は一般的でなく類例は少ない。
- ・銘文が簡潔。

イ 竜頭などに迫力がなく弱い感じを受けるが、作りはとても丁寧。

- ・ばりの始末をはじめとする仕上げが丁寧に行われている。

ウ 撞座に潰れなどが見られず、一見したところ保存状況は非常に良好である。

(鐘楼が壊れていた時期があり、その間使用されていなかったからか?)

□ア、イは比較的規格化される有名鋳物師たちの作ではなく、一地方の鋳物師である長兵衛の作風を色濃く表した結果であると考えられる。平均的規格から外れた鐘が各時代通じてないわけではないので、江戸時代初期の作として間違いないと思われる。

(3) まとめ

江戸時代に作られた鐘は 3 万口以上といわれるが、その大半が第二次世界大戦下の金属供出により鋳潰されてしまい、現在は 2~3 千口しか現存していないといわれる。戦時下に供出を免れた鐘は、慶長末年以前のもの、優品や美術的、歴史的価値が高いと判断されたものなどで、現在するそのいずれもが、国や県指定の文化財として保存されている。本門寺鐘は、江戸時代とはいえ、飛躍的に鋳造数が増加する明暦年間以前に作られた鐘で、供出をまぬがれた鐘との差は僅か 30 年にすぎない。有名出身地の鋳物師の作でも、芸術的にも特に優れた作品でもないが、第二次世界大戦下の金属供出の憂き目にあってなお、運よく鋳潰されることなく現存することができた鐘である。現在は鐘楼から降ろされており、大切に保管されていることから、現状以上に破損することはないであろうが、今後も指定文化財として保存、活用していくことが望まれる。

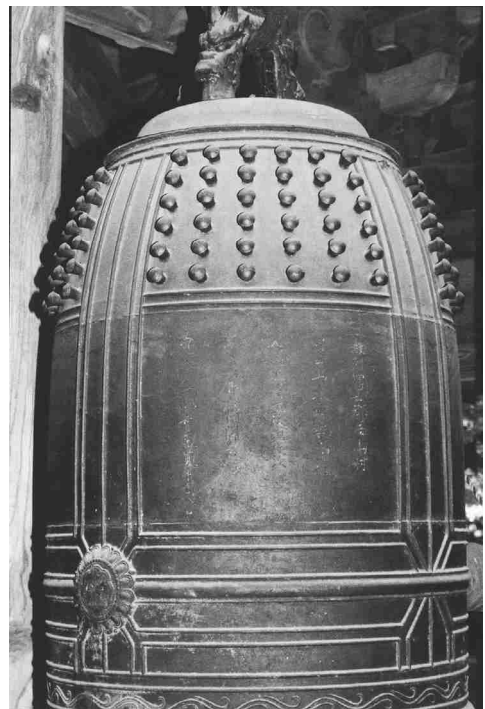


写真 9 西山本門寺梵鐘

(※4 高野穂多果：静岡県教育委員会文化財保護課)

10 小塚遺跡出土品（調査者：植松章八*5 調査日：平成 22 年 10 月 21 日）

(1) 旧芝川町指定の内容と現状

小塚遺跡（昭和 46 年度小塚遺跡第 1 次発掘調査）出土品のうち、旧石器 14 点を昭和 47 年 9 月 1 日付けで指定している。ただし、現在、その 14 点を特定する根拠は得られない。

(2) 指定の意義

富士宮市域で旧石器時代を文化層として確認される遺跡は、本遺跡と市内山本の下高原遺跡の 2 遺跡が知られる。下高原遺跡は第 2 東名用地内で発見・調査されて消滅している。したがって本小塚遺跡は旧石器時代の文化層が確認される市内における唯一の遺跡として重要である。なお、旧石器時代遺物が縄文・弥生時代遺跡内に混入する遺跡は市内で数箇所はみられるが、旧石器文化の内容把握が可能な遺跡としては小塚遺跡しかないことになる。

また、小塚遺跡は縄文時代草創期の集落跡として知られる大字大鹿窪で発見された大鹿窪遺跡とは 3 km ほど南に位置するが、大鹿窪遺跡と共通する時期が小塚遺跡にもあり、富士川流域における旧石器から縄文時代初期における歴史的検討の上でも重要な意味を認めることができる。

(3) 出土品の現状

小塚遺跡第 1 次調査における出土品のうち、旧石器時代石器は 33 点が報告書に記載されている。一方、約 300 点を超える未洗浄・未整理品が残されている。中には明らかに細石器とみられる例もあり、現在の調査視点からすれば、旧石器時代の石片や剥片類は石器製作技法や遺跡の性格を迫及する上で重要な意味をもつものと考えられている。

(4) 再指定にむけて

小塚遺跡の出土品の再指定については、次の手順を経る必要がある。

- ア 未洗浄・未整理資料の整理作業と調査
- イ 既報告資料の調査と比較検討
- ウ 報告書作成
- エ 再指定の検討

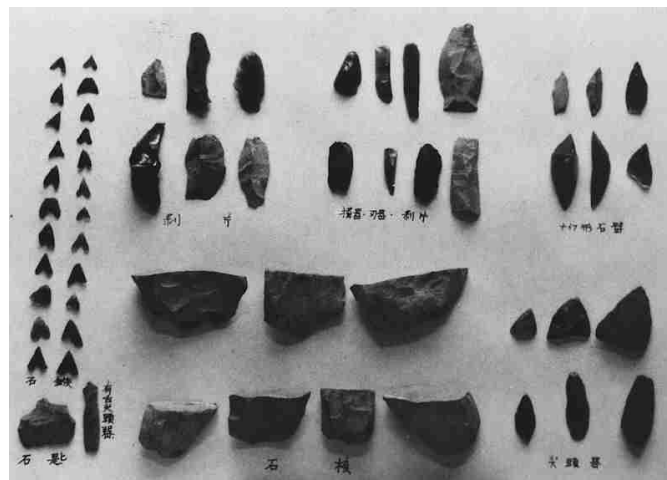


写真 10 小塚遺跡出土遺物

（*5 植松章八：富士宮市文化財保護審議会委員）

11 富士浅間神社の棟札（調査者：渡井正二*6 調査日：平成 22 年 9 月 24 日）

(1) 天正 11 年の棟札について

「天文拾壹年癸未」とあるが、天文 11 年(1542)は壬寅で、天正 11 年(1583)が癸未である。当時の人が年号と干支を間違えたとは考えにくく、後になって複製した可能性がある。

「勝千代丸」 穴山信君 天文 10 年（1541）～天正 10 年（1582）

穴山信治 元亀 3 年（1572）～天正 15 年（1587）

(2) 歴史資料としての棟札

市内で現存する棟札と対比して検討しなくてはならない。現存する 11 枚の棟札を基に、富士浅間神社の歴史を調査し、記録として残していく方向も考えられる。

主な棟札

	制作年	願主	大工・棟梁ほか	大きさ cm		
				縦	横	厚
1	天文 11 年(1542)	大檀那源朝臣勝千代丸	大檀那源朝臣勝千代丸	920	215	10
2	文禄 2 年(1593)	大檀那望月	大工者蒲原勝助以上四人	880	235	15
3	元和元年(1615)	大檀那源朝望月次左衛門	蒲原之大工仁兵衛殿	632	200	15
5	寛文 4 年(1664)	神主鈴木周防守藤原形部與長	大工杉山仁兵衛尉	997	243	19
6	嘉永 2 年(1849)	神主鈴木周防正藤原為久	當所廻澤大工糸川為輔尉源秀忠	960	173	10



写真 11 天文 11 年銘棟札

◆棟札（一）	天文二一年（一五四二）
【大きさ】	縦 920 / 880・横 215・厚 10
【表】	右意趣者 諸佛教世者住於大神通為悦衆生故現无量神力 駿・庵原郡蒲原庄内房郷尾崎村 (梵) 奉新造勸請富士浅間大菩薩八幡大菩薩両宮之事 武田
【裏】	大檀那源朝臣勝千代丸 称宣鈴木刑部大夫盛次是者本願敬白 下方称宣来 神主・大夫廣盛 大工遠州宰人 慈眼視衆生 福聚皆无量 時天文拾壹年 未 十二月十二日 庚申日也 錦織・大夫廣盛鈴木形大夫敬白 大檀那武田勝千代丸當郷長衆有奉裁諸願成就皆令満足砌

(*6 渡井章二：富士宮市文化財保護審議会委員長)

12 石造三面観音立像（調査者：渡井正二 調査日：平成 22 年 12 月 10 日）

(1) 三面二臂馬頭観音立像

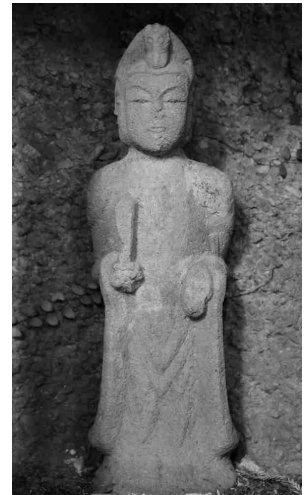
本成寺から峰の集落を通り塩出に向かう狭い峠道の大岩の上に、三面二臂の馬頭観音立像が祀られている。三面二臂の馬頭観音は、正面が菩薩面、左面瞋怒面、右面大笑面といわれるが、左右面とも柔和な表情である。

(2) 行事

峰と尾崎の集落では2月と11月の18日に祭りが行われていた。また三つの願いを聞き届けてくれるといわれ、願いが叶ったときには底無しの巾着を供えたといわれている。

市内に数多く見られる馬頭観音の中で、三面二臂の馬頭観音はここだけであり、特有の信仰形態も残っているので、有形民俗文化財として検討する必要もある。

写真 12 石造三面観音立像



13 釜口峡（調査者：渡井正二 調査日：平成 22 年 10 月 18 日）

(1) 富士川舟運の難所

釜口峡は、富士川舟運の十二難所の一つで、狭い谷に富士川の水が流れ込み、大滝・釜などの難場が集中する。中でも釜といわれる激しい流れが渦巻く所は、まさに地獄の釜が煮えたぎったように見え、恐れられていたといわれる。

なお、舟運の難所としての危険箇所、遭難の記録などを調査したい。

(2) 富士川の釣り橋

江戸時代富士川には橋はかけさせなかったといわれているが、ここだけが唯一釣り橋のあった所だといわれている。釣り橋の位置はどこであったのかを調査したい。

(3) 史跡としての範囲の確認

史跡として、下記の範囲を想定する必要がある。

釜口峡・遭難者供養塔・遭難者供養の寺（水神山本立寺）跡・釣り橋の跡

なお、富士川舟運の史跡については、釜口峡に止まらず市内の沼久保河岸・橋上の船宿についても調査して記録を残しておきたい。



写真 13 釜口峡

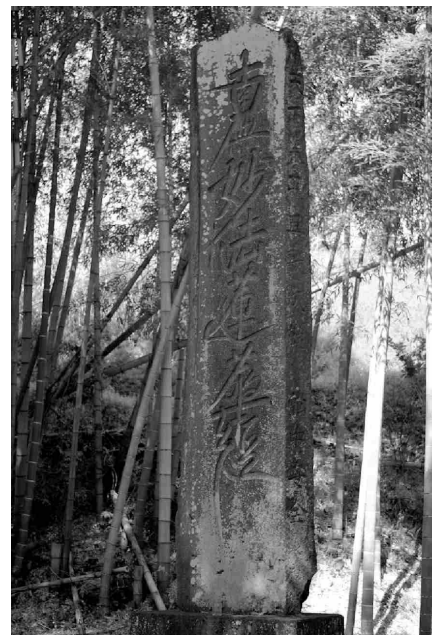


写真 14 水難者供養塔

14 桜峠（調査者：渡井正二 調査日：平成 22 年 10 月 18 日）

(1) 維盛と桜・三具神

維盛と桜・三具神については、伝説・伝承の域を出ない。

(2) 身延道

「みのぶへ七里」と刻された題目碑があり、江戸時代から明治時代にかけて身延道、甲州河内路への道として利用されたことは確かであるが、身延への道筋や道標は他にも見られ、それらと対比して検討しなくてはならない。

(3) 馬頭観音

峠の頂きに位置し、かつての交通手段であった馬の安全を祈願したものであろう、安永 7 年(1778)から大正 7 年(1918)までに造立された馬頭観音の石像が 7 基見られる。馬頭観音の複数の立地は、交通の難所や「つくれば」といわれるかつて馬の手当をした所にみられる。

(4) 勝軍地蔵

地蔵菩薩の異形で、甲冑を着け馬に乗り武器をかざす。戦勝祈願の地蔵として信仰されたが、本来は、煩惱・悪業に打ち勝つの意を持つといわれ、サイノカミとしての信仰がある。ここでも地域の平安や悪疫の退散、旅人の安全祈願などサイノカミとしての役割を担ってきた。

勝軍地蔵は市内に 1 例しかないので、有形民俗文化財として検討する必要がある。

桜峠石造物一覧

	種類	造立年月日	造立者	大きさ cm (縦×横×奥)	備考
1	題目塔	文久 2 年(1862)3 月 吉辰	上柚野村題目講中	125×64×64	道標有り
2	馬頭観音	安永 7 年(1778)9 月	上稲子村	53×25×19	
3	観音菩薩	明治 9 年(1876)12 月 18 日		59×30×15	
4	馬頭観音			64×36×15	
5	馬頭観音	大正 7 年(1918)11 月 17 日	上柚野大門稲葉馬太郎	54×32×16	
6	馬頭観音			50×23×14	頂部欠損
7	馬頭観音	安政 6 年(1859)4 月 日		50×28×13	
8	馬頭観音			39×21×16	
9	将軍地蔵	嘉永 5 年(1852)2 月 18 日		56×28×18	亀裂有り
10	不明	安政 6 年(1859)12 月 吉日	森村佐野喜左衛門	23×22×20	



写真 15 峠の石造物群



写真 16 題目塔



写真 17 勝軍地蔵

15 天然記念物調査樹木一覧（調査者：渡辺定元*7 調査日：平成22年10月18日）

No	名称	樹種	地区	根回り (cm)	目通り (cm)	枝張り(m)		樹高 (m)	備考
						東西	南北		
1	寛妙寺のイヌマキ	イヌマキ	内房	435	387	13.4	15.9	17.4	旧町指定
2	橋上ジロウガキ	カキ	内房	179	206	8.2	7.3	9	
3	橋上八幡宮のシイ	スダジイ	内房	520	310	20	16	15	
4	橋上八幡宮カゴノキ	カゴノキ	内房	280	235	16.6	17.4	22	
5	橋上八幡宮カゴノキ	カゴノキ	内房	405	340	14.7	14.1	20.1	ウロ有
6	橋上八幡宮カゴノキ	カゴノキ	内房	360	233	7	12	10	
7	本成寺のラカンマキ	ラカンマキ	内房	215	180	4	4	11	
8	尾崎のラカンマキ	ラカンマキ	内房	177	127	5	5	9	
9	塩出のシダレザクラ	シダレザクラ	内房	229	200	13	10	13	
10	塩出のカエデ	(カエデ)	内房	167	154	10	10	10	種別不明
11	相沼のスダジイ	スダジイ	内房	510	410	20	16	15	
12	落合のタラヨウ	タラヨウ	内房	287	140	6	6	14	
13	巡沢氏神のイチョウ	イチョウ	内房	520	400	20	30	23	
14	行道のウスギモクセイ	ウスギモクセイ	内房	190	190	12.3	10.7	10	旧町指定
15	大晦日のカヤA	カヤ	内房	414	319	18.5	18	29	
16	大晦日のカヤB	カヤ	内房	317	242				
17	大晦日のカヤC	カヤ	内房	365	268				
18	大晦日のタブノキ	タブノキ	内房	400	379	5.6	14.1	18	県指定
19	五輪のカヤ	カヤ	内房	507	430	16.9	20	20	県指定
20	上長貫氏神のエノキ	エノキ	長貫	520	400	6	13.5	9	
21	上長貫氏神のイチョウ	イチョウ	長貫	950	610	26.7	27.2	31.9	
22	楠金のスダジイ	スダジイ	長貫	690	630	21.4	21.4	19.7	旧町指定
23	楠金氏神のタブノキ	タブノキ	長貫	260	235	10	12	22	
24	楠金氏神のサクラ	(サクラ)	長貫	205	180				種別不明
25	楠金氏神のサクラ	(サクラ)	長貫	190	160	8	10	10	種別不明
26	長遠寺クスノキ	クスノキ	長貫	950	395	23	20	35	
27	長遠寺タブノキ	タブノキ	長貫	580	310	19	16.5	21.5	
28	平野氏神のエドヒガンザクラ	エドヒガン	羽鮒	505	443	23.4	19.7	13.8	
29	西山のヒヨクヒバ	ヒヨクヒバ	西山	553	340	12.6	8.2	20	旧町指定
30	本門寺イチョウA	イチョウ	西山	762	482	24.5	23	35	
31	本門寺イチョウB	イチョウ	西山	550	383	24.8	20	30	
32	本門寺のイヌマキ	イヌマキ	西山	580	315	14.7	14.1	18	旧町指定
33	本門寺のヒイラギ	ヒイラギ	西山	460	356	15.8	20	6.8	県指定
34	代世寺のイトヒバ	イトヒバ	鳥並	538	429	5.5	5.5	12	
35	代世寺のヒノキ	ヒノキ	鳥並	542	241	11	11	25	
36	代世寺のヤマザクラ	ヤマザクラ	鳥並						
37	代世寺のスギ	スギ	鳥並	715	352	10	10	30	
38	大鹿窪氏神イロハカエデ	イロハカエデ	大鹿窪	550	208	13.5	14	15	
39	大鹿窪氏神サクラ	(サクラ)	大鹿窪	260	193	13	15	17	種別不明
40	下柚野のヒイラギ	ヒイラギ	下柚野	296	160	6	6		
41	上柚野氏神のケヤキ	ケヤキ	上柚野	1040	420	12	13	20	
42	上柚野のツバキ	ツバキ	上柚野	200	150	8	8.4	13	
43	延命寺のシダレザクラ	シダレザクラ	上柚野	520	253	16.3	9	8	
44	猫沢のカシワ	カシワ	猫沢	385	190	2.8	20.2	6.7	旧町指定
45	門野のタブノキ	タブノキ	上稲子	600	360	14	12	14	ウロ有
46	入山の三色ツバキ	ツバキ	上稲子	170	140	12	10	10	
47	神矢野タブノキ	タブノキ	上稲子	430	385	16.3	18.2	19.6	
48	下稲子スダジイA	スダジイ	下稲子	610	360	16.8	16.3	25.3	
49	下稲子スダジイB	スダジイ	下稲子	430	395	23.8	19.4	22.8	
50	大間のモミジ	(カエデ)	下稲子	260	275	20	20	20	種別不明

(*7 渡辺定元：富士宮市文化財保護審議会委員)

「オールコックの富士登山」展

初代英国公使ラザフォード・オールコックによる外国人初の富士登山から150年

(1) オールコック初代駐日英国公使

ラザフォード・オールコック(Rutherford Alcock)(1809～1897 年)は、1859 年(安政 6 年)駐日英国総領事兼外交代表として来日し、途中一時帰国を挟み、1864 年まで初代英国公使を務めた。

オールコックは、外科医から外交官に転身し、中国・日本といった東アジア外交で長く活躍した。駐日公使在任中は、日英関係の進展に務め、開港開市延期問題や遣欧使節団の派遣、四国艦隊下関砲撃事件などに関わった。彼の日本駐在経験は自著『大君の都』に詳しい。

駐在時の 1860 年(万延元年)には大宮・村山口より富士登山を行った。これは、記録上、外国人初の富士登山であった。また、駐在当時は外国人襲撃事件が頻発しており、1861 年(文久元年)には、オールコック自身、英国公使館であった東禅寺(現東京都港区)を襲撃され、危うく難を逃れている。

オールコックは、駐在経験を活かし日本語や日本文化の著作を著したほか、1862 年のロンドン万博には日本で私的に収集した品々を出展して

いる。晩年は、王室地理学会会長や病院理事、慈善団体役員などを歴任するなど多彩に活躍した。

(2) 外国人の富士登山

地域に残された資料によると、幕末期、外国人による富士登山が 5 回行われた。最初に登山したオールコック以降、登山道には大宮・村山口が使用された。彼らは、公使館や領事館のある江戸・横浜方面から東海道を通過して吉原宿に至り、大宮町を経て村山に向かった。

また、当時の富士登山は同じ登山口から登山・下山することが一般的だったが、彼らの中には登山口と下山口を別にする者もいた。

【地域資料に見る幕末期の外国人登山】

年 号	内 容
万延元年 (1860)	英国公使オールコックらイギリス人 8 人
慶応 2 年 (1866)	スイス総領事ブレンワルト(Caspar Brennwald)らスイス人 4 人
	アメリカ公使ポートマン(Anton. L. C. Portman)ら 8 人
慶応 3 年 (1867)	オランダ総領事ポルスブルック(D. de Graeff van Polsbroek)らオランダ人 5 人・中国人 1 人
	英国公使パークス(Harry S. Parkes)、パークス夫人ら 10 人



写真 1 オールコック登山記念碑
(富士宮口五合目)

(3) オールコックの富士登山

万延元年 7 月(1860 年 9 月)、オールコックは、富士登山をするため旅に出た。これは、記録上、外国人として初めての富士登山であった。オー

ルコックは、大宮・村山口から富士山に登頂し、帰路熱海に滞在して温泉を楽しんだ。

旅には、オールコックを含む英国公使館職員らイギリス人 8 名に加え、通詞、外国奉行役人などが同行した。他にも、荷物を運ぶ人足・馬、案内・護衛などが加わり、オールコックの希望とは逆に大行列となってしまった。

この旅は、窮屈な江戸を離れ心身ともにリフレッシュすることが目的だったが、日英修好通商条約にある内地旅行権の確認や日本国内の世情視察を行いたいという政治的思惑もあった。また、富士山の科学的調査も計画され、英国インド海軍大尉ロビンソンによる測量や、園芸家ヴィーチによる植物調査が行われた。

(4) 富士山中

7 月 23 日、吉原宿に宿泊したオールコック一行は、翌日大宮町を経て村山に入った。そして天候が回復した 25 日、村山を出発し、登山を開始した。

① 大宮町

江戸時代の大宮町は、浅間神社領地(社領)と幕府直轄地(御領)からなっていた。オールコック一行の休憩・宿泊場所は社領に用意され、オールコックらイギリス人は浅間神社別当家に休憩・宿泊した。また、御領は一行の荷物を運ぶ人足・馬を用意した。

② 村山

オールコック一行は村山三坊のひとつ大鏡坊に宿泊した。オールコックは、大鏡坊で用意された風呂の仕組みや即席のソファに感心したという。『大君の都』には「寺院内の聖所を二つに仕切り、公使専用の部屋を用意してあった」とあり、奥の間がオールコックの部屋として使用されたと考えられる。

また、地域には、一行が缶詰を食べたり石鹼を使ったりしていたため、初めて見る缶詰や石鹼に大変驚いたという話が伝わっている。

【同行者】

イギリス人：公使オールコック、公使館職員ユースデン、公使館職員マクドナルド、公使館職員ガワー、英国インド海軍大尉ロビンソン、ガワー氏、園芸家ヴィーチ、
英国陸軍士官フォンブランク

幕府随行者：外国奉行調役、外国奉行同心、外国奉行定役、外国奉行調役並、小人目付、通詞（川原又兵衛） など

(フォンブランク著『日本と華北の二年間』、『袖日記』等から作成)

【旅行日程】

月日	日 程
7/19	神奈川の英国領事館出発～藤沢宿泊
/20	藤沢宿～小田原宿泊
/21	小田原宿～箱根宿泊
/22	箱根宿～三島宿泊
/23	三島宿～吉原宿泊(台風のため大宮町泊予定変更)
/24	吉原宿～大宮町(休憩)～村山(大鏡坊)泊
/25	村山から登山開始～中宮八幡堂～六合目山室泊
/26	六合目山室～頂上～一ノ木戸山室泊
/27	一ノ木戸～村山(昼食休憩)～大宮町泊
/28	大宮町～吉原宿～三島宿泊
/29	三島宿～韮山～熱海着
～	以後、熱海滞在
8/13	熱海を出発～小田原宿泊
/14	小田原宿～藤沢宿泊
/15	藤沢宿～神奈川の英国領事館帰着

③ 中宮八幡堂

中宮八幡堂は「馬返し」とも呼ばれ、ここからは徒歩で登山することになっていた。

25日早朝村山を出発した一行は、ここで馬を返し、荷物を強力に預けた。また、中宮八幡堂では金剛杖が販売されており、一行も杖を購入して身支度を整えた。



写真2 「富士登山」
(オールコック著『大君の都』より
：熱海市立図書館蔵)

④ 六合目山室

中宮八幡堂から徒歩での登山を開始した一行は、日暮れ頃、六合目(現元祖七合目)の山室に辿り着いた。持参した食料で簡単な夕食をとると、寒さとノミに耐えながら眠った。翌日は、熱いコーヒーとビスケットで朝食を済ませ、夜明けとともに出発した。



写真3 六合目(現元祖七合目)の山室

⑤ 山頂

空気の薄さや足場の悪さに苦しみながらようやく山頂に到着し、オールコック一行は素晴らしい眺めを堪能した。登頂した記念に、一行は山頂に英国旗を掲げ、火口に向けて祝砲を撃ち、山頂の万年雪で冷やしたシャンパンで乾杯をした。また、同行者のロビンソンは測量を行い、フォンブランクは寺院(大日堂か)で神仏のスタンプを押してもらった。



写真4 富士山頂(剣ヶ峰と噴火口・虎岩)

⑥ 一ノ木戸

登頂に成功したオールコック一行は、3時間かけて一ノ木戸(現四合目付近)まで降りた。その夜は同所の山室に泊り、翌日無事村山へと下山した。

村山で休憩した後、一行は夕方大宮町に至り、用意されていた宿舎に入った。

(5) 熱海

7月26日、大宮町を出発したオールコック一行は、東海道を東へ戻り、29日熱海に到着した。以降、8月13日まで温泉や散歩などを楽しんで過ごした。

滞在中、オールコックは愛犬トビー(Toby)を亡くすという大事件に遭った。トビーは住民達に手厚く弔われ、その親切さはオールコックをいたく感激させた。江戸に戻った後、彼は「Poor Toby」と刻んだ墓石を熱海に送り、愛犬の墓に建ててもらった。現在この墓石は、大湯間欠泉のそばに、オールコック滞在記念碑と並んで建っている。

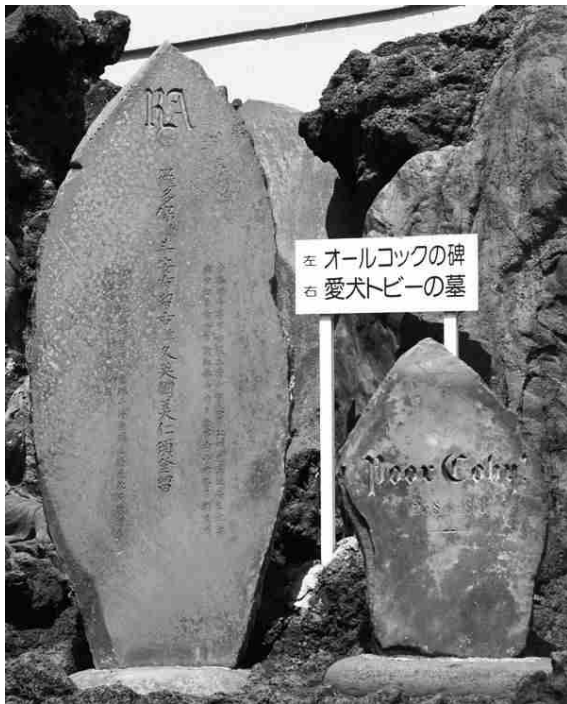


写真5 オールコック滞在記念碑(左)と
トビーの碑(右)

(6) 資料にみるオールコックの富士登山

前代未聞のことであったオールコック一行の富士登山は耳目を集め、一行が通過する東海道筋では見物制止命令が出されるほどだった。また、富士山の化身である天狗がオールコックの登山に怒ったため、登頂できなかったとする瓦版も発行された。

地域に伝わる資料にも当時の様子が記されている。大宮町の造酒屋の当主の日記『袖日記』には、一行の外見や荷物などを興味深く観察し、伝聞を交えつつ書きとめられている。また、オールコック一行のために、大宮町が宿泊場所の用意や人足・馬の手配など様々な準備や対応を行っていたことも記されている。しかし、これらの負担は重いものであったため、オールコック以降の外国人登山の際にも度々問題となった。

富士山麓の森林を管理していた富士山御林守上役石川孫四郎の日記には、オールコックの登山に備え、事前に富士山に登山したことが記されている。

オールコック以降も、富士山に登山するため外国人が大宮・村山口に訪れた。大宮町の町役人角田桜岳の日記(『角田桜岳日記五』所収)には、登山に来たスイス人(慶応2年スイス総領事ブレンワルト一行)や、アメリカ人(慶応2年アメリカ公使ポートマン)を見物するために周辺の人々が大勢集まっていたことが記されている。

「オールコックの富士登山」展

会期：平成22年6月25日(金)～7月11日(日)

場所：富士宮市富士山環境交流プラザ

主催：富士宮市教育委員会（富士宮市弓沢町150番地 電話：0544-22-1111(代)）

西山本門寺と大鹿窪遺跡を訪ねる

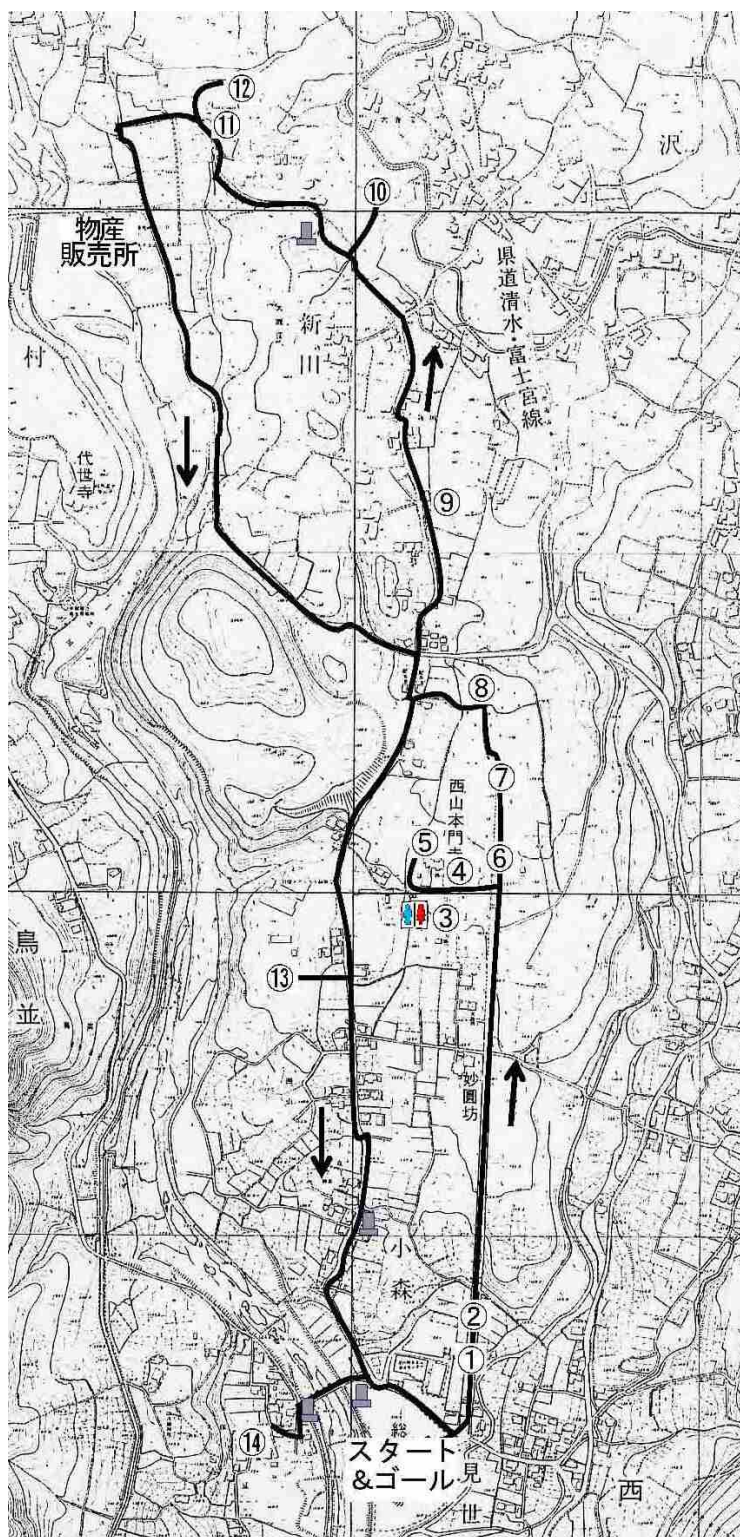
距離約 6 km、徒歩約 3 時間

富士五山のひとつに数えられる大寺「西山本門寺」や、堅穴住居による集落址としては国内最古の例である国史跡「大鹿窪遺跡」をめぐる。

【見学ルート】

富士宮市芝川スポーツ広場駐車場

- ↓
- ①黒門
- ↓
- ②参道
- ↓
- ③鐘楼
- ↓
- ④本堂
- ↓
- ⑤ヒイラギと首塚
- ↓
- ⑥中門跡
- ↓
- ⑦三堂跡
- ↓
- ⑧歴代住職の墓
- ↓
- ⑨道祖神
- ↓
- ⑩甲子
- ↓
- ⑪福石神社
- ↓
- ⑫大鹿窪遺跡
- ↓
- ⑬小森の八幡宮
- ↓
- ⑭窪尼御前の堂
- ↓
- 富士宮市芝川スポーツ広場駐車場



【西山本門寺】

「富士五山」のひとつに数えられる大寺であり、康永3年（1344）に日代が開創したとされる。日代は、河合郷（富士宮市長貫）に生まれ、北山本門寺や大石寺を開いた日興の弟子となり、北山本門寺を継いだ。しかし、同地の地頭石川氏等と不和となったため、西山に移り、大内安清（安浄）の助力を受け西山本門寺を開いた。

江戸時代になると、十八代日順が後水尾天皇娘常子内親王の帰依を受けたり、二十代日円が水戸徳川家出身であったりしたことから、公家・大名等の援助を受け、多数の坊や堂が整えられた。

現在、西山本門寺には、国指定重要文化財の「紺紙金字法華経」や「日蓮遷化記録」、「紙墨法華経」などの貴重な文化財が伝わっている。

①黒門

門前には、かつて貴賤を問わず参詣者に下馬下乗を求める「下馬札」が掲げられていた。これは、西山本門寺中興の祖である十八代日順が、後水尾天皇娘常子内親王の帰依を受け、内親王の両親である後水尾天皇・新広義門院の位牌を祀ったことに由来するという。

黒門は、安政東海地震（1854）で破損したが、明治17年（1884）に大修理が行われた。



写真1 西山本門寺黒門

②参道

長さ約1,500m、幅約15mあり、両側にはスギやヒノキの大木が並んでいる。参道沿いには、妙円坊・浄円坊・大詮坊の3坊がある。往時には、他にも多数の坊が並んでいたが、度重なる火災や安政東海地震等の災害、時勢の変化により退転したという。参道の左右には、所々に灯籠や石段があり、退転した坊の入口と思われる。

③鐘楼

鐘楼は、寛永21年（1644）、富士郡阿原口村の清主殿政次とその弟右衛門尉政家が奉納したと伝えられる。安政東海地震で破損したため、現在地に再建されたという。

梵鐘は、銘文によると、寛永21年に政次・政家が江戸の尾崎長兵衛に作らせたものだという。大きさは、高さ139cm（うち竜頭の高さ27.5cm）、口径74.6cmある。現在は本堂に置かれており、鐘楼には別の梵鐘が下げられている。

また、鐘楼の近くにはイチョウの巨樹が2本ある。

④本堂

もとは客殿だったが、安政東海地震で本堂（本尊堂）が破損したため被害の少なかった客殿に本尊を安置する厨子を遷し、以後本堂として使われている。享保6年（1721）の年号が記された棟札が伝わっており、建築様式からも同年代の建立と考えられている。

堂内の厨子（静岡県指定文化財）には日蓮像が納められている。この厨子は、寛永 2 年（1625）に大坂の豪商七里久円・宗円父子が奉納したものである。精緻な細工・彫刻が施された桃山造りの厨子で、大きさは間口・奥行き一間あり、正面の軒には唐破風がある。

⑤ヒイラギと信長の首塚

静岡県の天然記念物に指定されているヒイラギの巨樹の根元には、織田信長の首を納めた首塚があるといわれている。寺に伝わる伝承によると、本能寺の変の際、本因坊算砂（日海）の指示を受けた原志摩守宗安が、信長の首を父胤重・兄孫八郎清安の首と共に本能寺から持ち出したという。その後、西山本門寺に首塚を築いて納め、傍らにヒイラギを植えたという。また、十八代日順は原志摩守宗安の子であり、過去帳に本因坊算砂と織田信長の法号を記して供養した。

ヒイラギの巨樹は、現在樹勢が衰えつつあるが、目通り 3.56m、樹高 6.8m あり、樹齢 500 年ともいわれる。ヒイラギは成長が遅いため巨木は少ないという。ヒイラギは古木になると葉のとげが目立たなくなることがあり、このヒイラギも葉にとげがない。



写真 2 ヒイラギと信長の首塚

⑥中門跡

古絵図には四脚門が描かれており、現在はその礎石が残されている。四脚門は、本柱の前後に控柱計四本を立てる構造で、門の中でも格の高い様式とされる。ここの四脚門は、本柱の間が約 5.5m あり、桧皮葺の屋根だったとされる。安政東海地震で大きな被害を受けたという。

⑦三堂跡

かつてはここに本尊堂（中央）、開山堂（西側）、祖師堂（東側）が並んでいたが、現在はそれらの基壇と礎石が残されている。三堂は、安政東海地震の際に大きな被害を受けたという。

三堂の前には、それぞれ石灯籠一対がある。祖師堂前の石灯籠には、寛文 7 年（1667）の年号と「願主寺中興卒光坊日得」「願主鳥波村山本甚五兵衛」の銘が、本尊堂前のものには寛文 7 年（1667）の年号と「願主当村新垣外講衆中」「願主佐野助左衛門尉」の銘が、開山堂前のものには寛文 10 年（1670）の銘と「願主当山十八代日順」「願主阿原口講衆中」の銘がある

⑧歴代住職の墓

西山本門寺歴代住職の墓石と日蓮の墓石が並んでいる。日蓮の墓石は、後水尾天皇一周忌にあたる天和元年（1681）が日蓮四百遠忌と重なることから、後水尾天皇娘常子内親王が建立したものである。また、近くには大内安清（安浄）の墓がある。

⑨道祖神

帽子のようなものをかぶった双体道祖神で、「安永九年十一月吉日」「新田村 施主九口」の銘がある（安永 9 年は 1780 年）。

道祖神は、道の神として道端に祀られたり、集落に入る悪いものを遮る神として集落の境に祀られたりする。市内では、双体道祖神の他にも、「道祖神」の文字だけが彫られた文字道祖神などが見られる。

⑩甲子

大きく「甲子」と彫り込まれた石碑と、新田下村によって寛政 5 年（1793）4 月に建立された甲子塔が並んでいる。これらは甲子信仰の石造物である。甲子信仰は、甲子の日を祭日とするもので、村方では農業の神として、町方では福の神として、大黒天や大国主命（おおくにぬしのみこと）が祭られた。祭日には、人々が集まって飲食をしながら夜更かしをすることが多く行われた。また、年に 6～7 回ある甲子の日のうち、旧暦 11 月の甲子の日を主な祭日とし、黒豆や二股大根を供えることが多く行われた。

⑪福石神社

『神社明細帳』には元暦元年（1184）の創建とある。浅間大社に伝わる資料（寛政 2 年寺社奉行に提出した文書）には、末社として「大鹿村福石神社」があげられており、浅間大社と縁のある神社である。また、棟札には祭神として、「天照皇太神、大鹿宮福石大明神、木花開那姫命、富士浅間大明神」と記されている。

現在、境内には、八坂神社（明治 4 年東村から移転）、天神社（明治 10 年天神原から移転）が合祀されている。また、それぞれ享保 7 年（1722）、文政 4 年（1821）、安政 7 年（1860）の銘が記された石灯籠 3 基がある。

⑫大鹿窪遺跡（国指定史跡）

縄文時代草創期の遺跡で、新富士火山の泥岩流により形成された溶岩台地上に位置し、遺跡の北東方向には富士山が見える。ここからは、14 基の竪穴住居址や 26,000 点に及ぶ縄文土器・石器等が発見された。竪穴住居による集落としては国内最古であり、住居数も同時期では最多であることから、平成 20 年 3 月に国の史跡に指定された。また、石鏃（弓矢のやじり）、尖頭器（槍のほさき）などの狩猟具、ドングリなどの木の実を調理するために使用された石皿・磨石、この時期に特徴的な石器である矢柄研磨器（矢を製作するための道具）などが発見された。

⑬小森の八幡宮

小森地区の氏神であり、祭神として応神天皇が祀られている。この地域の氏神の祭礼は、「お日待ち」の日（10 月 17 日）やその前後に行われることが多い。この八幡宮では、祭礼の際にハナ（竹の先を割って垂らし、紙花で飾った飾り物）を立てる。

⑭窪尼御前の堂

堂内に窪尼御前を祀る題目塔がある。窪尼御前は、妙心尼（持妙尼）とも呼ばれ、日蓮の直檀（直接教えを受けた信徒）とされる。日興の叔母に当たり、夫高橋入道の死後は実家近くである西山の窪（久保）の地に住んだという。

平家落人伝説の里を歩く

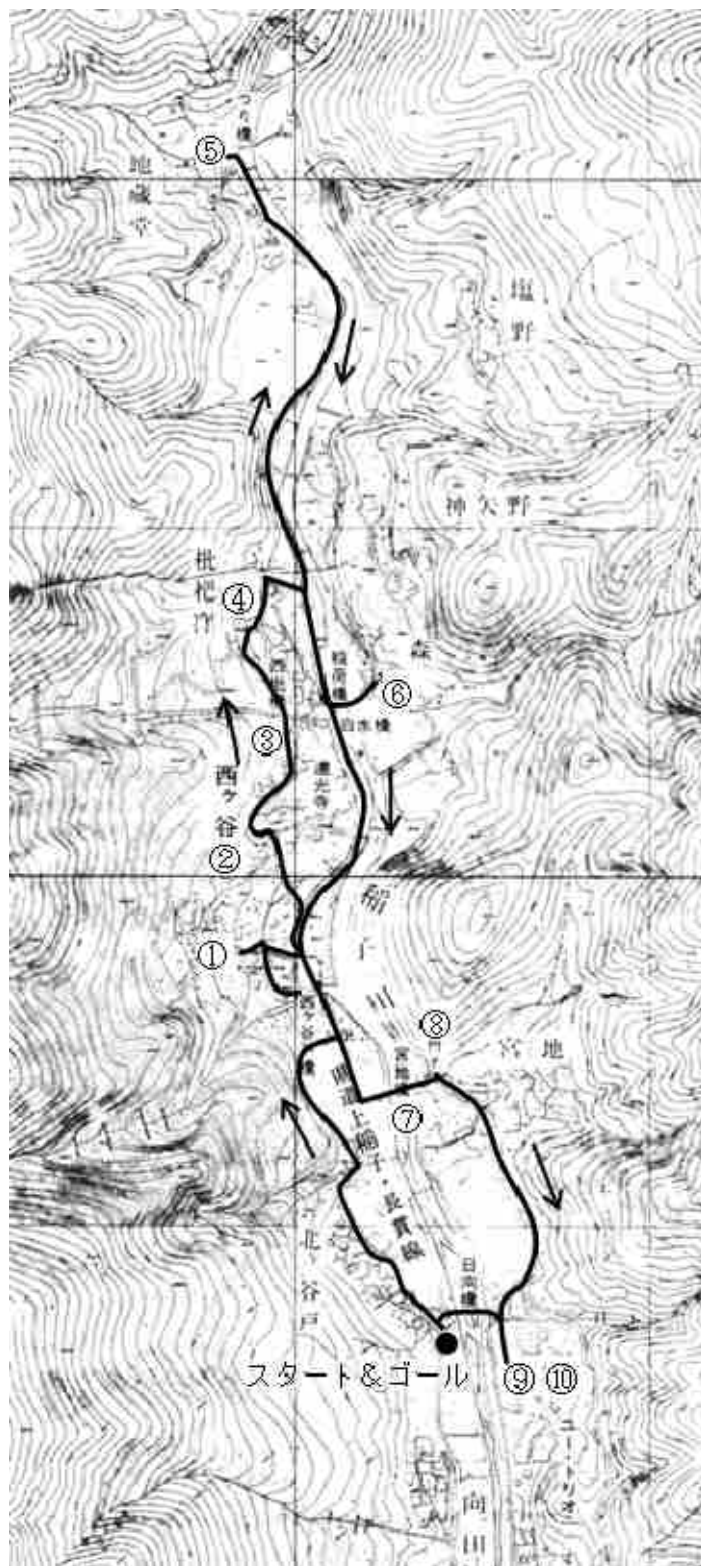
距離約5km、徒歩約3時間

稲子川沿いに広がる上稲子地区には、その昔戦いに敗れた平維盛が落ち延びた場所とされ、「平維盛の墓」や「枇杷窪」といった平家にまつわる地名が残る。平家落人伝説の里を巡る。

【見学ルート】

スタート ユー・トリオ第3駐車場

- ↓
- ①平維盛の墓
 - ↓
 - ②浄泉寺跡
 - ↓
 - ③山ノ神社
 - ↓
 - ④平家落人伝説（枇杷窪）
 - ↓
 - ⑤六地藏石幢
 - ↓
 - ⑥稲荷神社
 - ↓
 - ⑦宮地橋（稲子川）
 - ↓
 - ⑧上稲子八幡宮・城山
 - ↓
 - ⑨道祖神
 - ↓
 - ⑩身延道（桜峠・石神峠）
 - ↓
- ゴール ユー・トリオ第3駐車場



【平家落人伝説と平維盛（たいらのこれもり）】

上稲子地区は、治承・寿永の乱に敗れた平維盛が逃れて来て隠れ住んだ場所だと伝えられる。平維盛は、重盛の長男で、富士川の戦いや倶利伽羅峠の戦いなどに参加した。一ノ谷の戦い前後に平家一門から離れ、東国に下る途中で病死した（『源平盛衰記』）とも、那智・熊野（和歌山県）に至り 27 歳で自殺した（『平家物語』）とも伝えられる。しかし、実は維盛は死んでおらず、落ち延びて隠れ住んだという話が上稲子の他にも奈良県や和歌山県などに各地に伝わっている。

平維盛をはじめ、治承・寿永の乱に敗れた平家一門やその家来らが落ち延び、隠れ住んだと伝えられる場所は日本各地にある。そういった場所は「平家落人の里」とも呼ばれ、その数は日本全国で 100 箇所を越えるという。また、平家落人の里は、山間や谷間など交通の便の悪い場所にあることが多い。

①平維盛の墓

地域に伝わる伝承によると、平維盛は、那智の沖で入水自殺したと見せかけてその実出家し、ひそかに熊野山中に逃れ、家臣の佐野主殿頭と共に駿河国に落ち延びたという。そして、父重盛の旧領地であった稲子の地に隠れ住み、この稲子で亡くなったという。このため、ここに埋葬し、西光寺が菩提を弔ったという。

棚田の中に維盛の墓と伝えられる塚がある。墓碑は天保 11 年（1840）に周辺の住民により再建されたもので、「平権亮三位中将維盛覚正院殿如山道誉法師位」と刻まれている。維盛の墓を守る家には維盛縁のものとされる刀が伝わっている。また、墓の周辺の家では毎年 8 月に維盛の供養を行っているという。

墓の周囲の棚田は、「柚野の棚田群」の一部として静岡県棚田等十選に選定されている。棚田の上の山中には平重盛を祀る小松神社がある。



写真 1 平維盛の墓

②浄泉寺跡

ここには正法寺（市内上柚野）末寺の浄泉寺があったが、廃寺となり、現在は歴代住職の墓や石造物が残されている。浄泉寺は、元は延命寺（市内上柚野、曹洞宗）末寺西光寺だったが、廃寺となり、その後浄泉寺として中興されたという。また、西光寺には、平維盛の位牌が祀られていたが、浄泉寺となった際にその戒名も変えられたという。

浄泉寺には、市立稲子小学校前身の「有楽洞」（明治 15 年「稲子学校」に改称）が置かれていた。有楽洞は、明治 8 年（1875）に蓮光寺（上稲子字西ヶ谷戸）を教場として設立された。その後、明治 13 年（1880）浄泉寺本堂に移り、明治 14 年（1881）現在地に校舎を新築して移転するまでの間浄泉寺に置かれた。

③山ノ神社

上稲子の山ノ神社の総社とされる。社殿には獣に乗る男神像が祀られている。また、社殿の後ろに石祠がある。

山間の上稲子地区では山仕事が重要であり、各集落で丁重に山ノ神を祀っていたという。



写真 2 山ノ神社の石祠

④平家落人伝説（枇杷窪）

上稲子地区はかつて平重盛（小松大臣）の領地であり、平維盛や平家の家臣などの落人が逃れて来て隠れ住んだと伝えられる。このため、上稲子地区には次のような平家落人に関連した地名が伝えられている。

枇杷窪：『平家物語』を語る琵琶法師の「琵琶」に音が通じる。

自害沢：敗れた平氏軍勢の一部が逃れ来て自害した場所とされる。

⑤六地藏石幢（せきどう）

この付近の小字名は「地藏堂」といい、六地藏の刻まれた石幢がある。六角柱の胴体（幢身）の各面に地藏の浮き彫りが刻まれているが、風化が進み像容は不鮮明である。かつては周辺の家々によって祭りが行われていたという。

石幢は、石造物のひとつで、梵字や仏像を刻んだ六角形や八角形の細長い胴体の上に笠がついたものや、石灯籠のような形をしたものがある。



写真 3 六地藏石幢

⑥稲荷神社

周辺の枇杷窪（びわくぼ）・森（もり）・神矢野（じんやの）・地藏堂（じぞうどう）の 4 集落が祀っている。かつては、2 月初午の祭礼に芝居が行われたり露天商が立ったりして賑ったという。

『柚野村誌前記』によると、祭神は宇迦之御魂神であり、嘉永 2 年（1849）に勧請したという。

⑦宮地橋（稲子川）

稲子川にかかる宮地橋の上流左岸には「宮地」の字名の由来である上稲子八幡宮がある。稲子川は、天子ヶ岳を水源とし、北から南に流れ下稲子で富士川に合流する。稲子川に沿って上稲子・下稲子の各集落が展開している。上流には「天子七滝」と呼ばれる滝があり、また、上稲子から下稲子の河岸には梅林が点在している。



写真 4 宮地橋と城山

⑧上稲子八幡宮・城山

上稲子地区の氏神である。社殿に祀られた厨子には応神天皇・仲哀天皇・神功皇后の3体の神像が納められている。この厨子は幕末のものと伝えられ、近年修復された。また、神社には江戸時代以降の棟札が伝わっている。

神社の裏山は、戦国時代、山城（稲子城）があった場所とされ、「城山」と呼ばれている。



写真5 八幡宮

⑨道祖神

双体道祖神があり、周辺の集落で祀っている。ここは、桜峠に至る「宇東坂」と呼ばれる場所で、道祖神のほかにも甲子と金比羅が祀られている。また、高札場があった場所だといわれる。

道祖神の祭りであるどんど焼きの際、ここには飾り物「ヤナギ」が立てられる。ヤナギは、青竹を割って柳のように垂らし、色紙で作ったハナを飾るものである。どんど焼きが終わるとヤナギは輪にたがめられ、道祖神の前に供えられたり、火伏のために各家に配られたりする。ヤナギは太平洋戦争のために作られなくなっていたが、近年再び作られるようになった。

また、どんど焼きの際にヤナギを立てる習俗は、市内では稲子地区のほか根原地区と杉田地区に見られるのみであるが、山梨県では多く行われている。

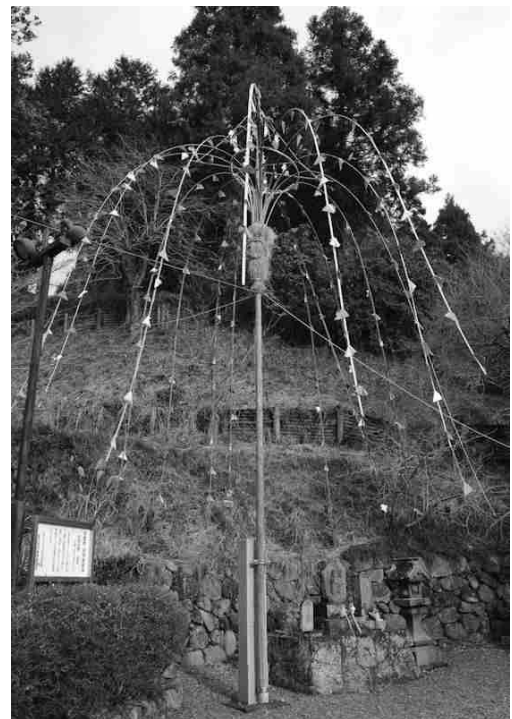


写真6 ヤナギ

⑩身延道（桜峠・石神峠）

上稲子には、柚野から桜峠・石神峠・大島峠を経て身延山久遠寺（山梨県身延町）に至る身延道が通っている。上柚野から上稲子に至る桜峠には、「みのぶへ七里」と刻まれた文久2年（1862）造立の題目塔や、馬頭観音、勝軍地藏が残されている。上稲子から佐野（山梨県南部町）に至る石神峠（地藏峠）は、駿河国（静岡県）と甲斐国（山梨県）の国境（県境）にあたる。

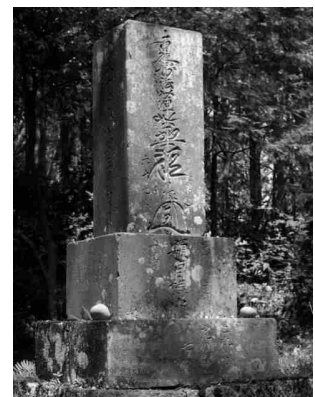


写真7 道標の刻まれた題目塔（桜峠）

資料Ⅴ 「富士宮市歩く博物館」案内

「富士宮市歩く博物館」のご案内

「歩く博物館」とは、富士宮市内に点在する文化財（歴史・民俗・自然など）を歩いて巡り、見て、ふれ、感じてもらうものです。市内に、各地域の特色を活かした 18 コースを設定しています。また、芝川地区の 5 コースを新しく作成しています。

個人・グループで自由に利用できるよう、地図・解説を載せた「歩く博物館パンフレット」（無料）や「歩く博物館ガイドブック」（有料）を作成し、各コース内に案内板を設置しています。

「歩く博物館」をご利用いただき、富士宮を知る手がかりとしていただければ幸いです。

「歩く博物館」コース一覧とパンフレット配布場所

No	地 区	タ イ ト ル	配 布 場 所
	全地区	全コース	富士山文化課・郷土資料館
1	A 猪之頭	湧水を活かした産業コース	上井出出張所
2	B 上野	石造物をたずねるコース	上野出張所
3	C 上井出・白糸	富士の巻狩コース	上井出出張所・白糸出張所
4	D 富士根北	道者道を歩くコース	富士根北公民館
5	E 北山	中道往還の旧道を歩くコース	北山出張所
6	F 富丘	風祭の里を歩くコース	富丘公民館
7	G 泉・野中	飢渴川から潤井川コース	西公民館
8	H 東 大宮東	旧大宮町東地区をめぐるコース	中央公民館
9	H 西 大宮西	旧大宮町西地区をめぐるコース	中央公民館
10	I 富士根南	泉と古墳をたずねるコース	富士根南公民館
11	J 黒田・星山	星山のでひきと倭文神社コース	南部公民館
12	K 白糸	昔話の里を歩くコース	白糸出張所
13	L 杉田	狸寺と子安神社をたずねるコース	富士根南公民館
14	M 山宮	山宮浅間神社と御神幸道をたずねるコース	北山出張所
15	N 万野原新田	万野原開墾の歴史コース	大富土地域学習センター
16	O 安居山	安沼用水の里を歩くコース	西公民館
17	P 沼久保	渡船と舟運の跡をたずねるコース	西公民館
18	Q 黒田・山本	山本勘助と俳人梅市の里をたずねるコース	南部公民館
19	西山・大鹿窪	西山本門寺と大鹿窪遺跡を訪ねるコース	(作成中)
20	上稲子	平家落人伝説の里を歩くコース	(作成中)
21	内房	内房の里を訪ねるコース	(作成中)
22	羽鮒・長貫	富士川と長貫・羽鮒地区を訪ねるコース	(作成中)
23	柚野	柚野の里を歩くコース	(作成中)

* 富士宮市教育委員会富士山文化課 HP で PDF 版がダウンロードできます。

<http://www.city.fujinomiya.shizuoka.jp/e-bunka/aruku.htm>

資料 vi 富士宮市内指定文化財一覧

〈平成 23 年 3 月 31 日現在〉

	種 別		文化財の名称	所在地	所有者（管理者）	指定日	備 考
1	国	重要文化財・建造物	富士山本宮浅間神社本殿	富士宮市宮町 1-1	富士山本宮浅間大社	明 40.5.27	
2	〃	重要文化財・建造物	大石寺五重塔	〃 上条 2057	大石寺	昭 41.6.11	
3	〃	重要文化財・絵画	絹本著色富士曼荼羅図	〃 宮町 1-1	富士山本宮浅間大社	昭 52.6.11	
4	〃	重要文化財・工芸品	太刀 銘景光	〃 〃	〃	明 45.2.8	
5	〃	〃 ・ 〃	脇差 銘信国	〃 〃	〃	〃	
6	〃	〃 ・ 〃	太刀 銘吉用	〃 上条 2057	大石寺	大 12.3.28	附 元禄 13 年極月折紙
7	〃	重要文化財・書跡典籍	紙墨法華経	〃 西山 671	西山本門寺	昭 24.2.18	8 巻
8	〃	〃 ・ 〃	紺紙金字法華経	〃 〃	〃	〃	10 巻
9	〃	〃 ・ 〃	法華證明鈔	〃 〃	〃	昭 27.7.19	
10	〃	〃 ・ 〃	貞観政要巻第一日蓮筆	〃 北山 4965	北山本門寺	〃	2 巻
11	〃	〃 ・ 〃	藍紙細字金字法華経	〃 〃	〃	昭 29.3.20	
12	〃	〃 ・ 〃	日蓮自筆遺文	〃 上条 2057	大石寺	昭 42.6.15	26 巻
13	〃	〃 ・ 〃	日蓮遷化記録	〃 西山 671	西山本門寺	平 5.1.20	
14	〃	特別名勝	富士山	富士山略二合目以上	富士宮市他	昭 27.11.22	
15	〃	特別天然記念物	狩宿の下馬ザクラ	富士宮市狩宿 98-1	井出信子(富士宮市)	昭 27.3.29	
16	〃	〃	湧玉池	〃 宮町 1-1	富士山本宮浅間大社	〃	
17	〃	天然記念物	万野風穴	〃 山宮字長穴	富士宮市他	大 11.3.8	穴全部・間口 30 間
18		史 跡	千居遺跡	〃 上条 1818	大石寺	昭 50.6.26	
19	〃	〃	大鹿窪遺跡	〃 大鹿窪 426-1 他	富士宮市	平 20.3.28	
20	〃	〃	富士山	富士山八合目以上他	富士宮市他	平 23.2.7	含 富士山本宮浅間大社・山宮浅間神社・村山浅間神社・大日堂
21	〃	名勝・天然記念物	白糸ノ滝	富士宮市上井出・原	(富士宮市)	昭 11.9.3	
1	県	建造物	本門寺の厨子	富士宮市西山 671	西山本門寺	昭 29.1.30	
2	〃	〃	富士山本宮浅間大社社殿	〃 宮町 1-1	富士山本宮浅間大社	昭 29.1.30	楼門・拝殿・幣殿・透塀 2

No.	種 別		文化財の名称	所在地	所有者（管理者）	指定日	備 考
3	県	建造物	大石寺御影堂	富士宮市上条 2057	大石寺	昭 41.3.22	附 厨子
4	〃	〃	大石寺三門	〃 〃	〃	〃	
5	〃	絵 画	富士浅間曼荼羅図	〃 宮町 1-1	富士山本宮浅間大社	昭 56.10.23	
6	〃	工芸品	青磁蓮弁文大壺	〃 〃	〃	昭 52.3.18	
7	〃	〃	青磁浮牡丹文香炉	〃 〃	〃	〃	
8	〃	〃	人形手青磁大茶碗	〃 〃	〃	〃	附 屈輪彫天目台
9	〃	〃	鉄板札紅糸威五枚胴具足	〃 〃	〃	〃	
10	〃	〃	脇差銘出羽大掾藤原国路	〃 大中里 396-2	渡辺 英男	昭 37.6.15	
11	〃	書 跡	明本（万暦本）一切経	〃 上条 2057	大石寺	昭 52.3.18	2470 冊
12	〃	典 籍	重須本曾我物語	〃 北山 4965	北山本門寺	昭 53.10.20	10 冊
13	〃	天然記念物	村山浅間神社の大スギ	〃 村山 1151	村山浅間神社	昭 31.5.24	
14	〃	〃	本門寺のヒイラギ	〃 西山 671	西山本門寺	〃	
15	県	天然記念物	北山本門寺のスギ	〃 北山 4965	北山本門寺	昭 32.5.13	題目スギ 3 本残存
16	〃	〃	五輪のカヤ	〃 内房 5681	望月 旭	昭 40.3.19	
17	〃	〃	村山浅間神社のイチョウ	〃 村山 1151	村山浅間神社	昭 43.7.2	
18	〃	〃	上条のサクラ	〃 上条 923	佐野 一男	〃	
19	〃	〃	富士山芝川溶岩の柱状節理	〃 羽鮒 1539-2	野村 藤男	昭 59.3.29	
20	〃	〃	猪之頭のミツバツツジ	〃 猪之頭 688	高野 幸孝	昭 60.11.29	
21	〃	〃	大晦日のタブノキ	〃 内房 5681	望月 旭	昭 62.3.20	
22	〃	〃	芝川のポットホール	〃 下柚野 319 地先	下柚野区	平 7.3.20	及 下柚野 321-2.322-7 地先
23	〃	無形民俗文化財	富士宮囃子	〃 宮町他	富士宮囃子保存会	平 7.3.20	
1	市	建造物	妙蓮寺の表門及び客殿	富士宮市下条 668	妙蓮寺	昭 60.3.11	含客殿内香炉・35 号
2	〃	〃	平等寺の三門	〃 東町 4-24	平等寺	昭 60.3.11	平唐薬医門・21 号
3	〃	〃	井出家高麗門及び長屋	〃 狩宿 91-1	富士宮市	平 7.3.16	31 号
4	〃	絵 画	天象の図	〃 村山 1151	村山浅間神社	昭 55.1.11	11 号

No.	種 別		文化財の名称	所在地	所有者（管理者）	指定日	備 考
5	市	絵 画	太郎坊権現の図	富士宮市村山 1151	村山浅間神社	昭 55.1.11	11 号
6	〃	〃	阿字曼荼羅	〃 〃	〃	〃	〃
7	〃	〃	伝末代人画像	〃 〃	〃	〃	〃
8	〃	工芸品	伝源義助大薙刀	〃 宮町 1-1	富士山本宮浅間大社	昭 40.5.10	8 号
9	〃	彫 刻	大日如来坐像（胎蔵界）	〃 村山 1151	村山浅間神社	昭 57.8.23	12 号
10	〃	〃	大日如来坐像（金剛界）	〃 〃	〃	〃	13 号
11	〃	〃	大日如来坐像（胎蔵界）	〃 〃	〃	〃	14 号
12	〃	〃	役行者倚像	〃 〃	〃	〃	15 号
13	〃	〃	不動尊像	〃 〃	〃	〃	17 号
14	〃	〃	隋身像	〃 宮町 1-1	富士山本宮浅間大社	平 5.5.25	2 体・29 号
15	〃	書跡	後陽成天皇宸翰	〃 〃	〃	昭 40.5.10	7 号
16	〃	典籍	外国語（英・蘭）辞書類一括	〃 中央町 11-2	中西 信子	昭 63.4.15	6 冊・27 号
17	〃	古文書	袖日記	〃 大宮町 7-16	横関 及彦	昭 60.3.11	9 冊・22 号
18	〃	考古資料	三連甕形土器	〃 黒田 1373-13	若林 和司	昭 55.1.11	野中向原遺跡・10 号
19	〃	〃	安養寺の土偶	〃 杉田 489	安養寺	昭 57.8.23	16 号
20	〃	〃	駿州富士郡二股村石経塚	〃 栗倉 1050-1	小林 充	昭 63.4.15	28 号
21	〃	天然記念物	大宮縄状溶岩	〃 元城町 32	富士宮市	昭 44.4.1	9 号
22	〃	〃	フジキクザクラ	〃 上条 2057	大石寺	昭 57.8.23	18 号
23	〃	〃	中央町のカヤ	〃 中央町 11-2	中西 信子	〃	19 号
24	〃	史 跡	大室古墳	〃 小泉 1467-1	上小泉八幡宮	昭 60.3.11	24 号
25	〃	〃	中野梅市建立の句碑	〃 黒田 36	本光寺	〃	26 号
26	〃	〃	虚空蔵社古墳	〃 西小泉町 59-4.5	鈴木 英光	平 5.5.25	30 号
27	〃	〃	人穴富士講遺跡	〃 人穴 206	人穴浅間神社	平 11.6.23	33 号
28	〃	無形民俗文化財	火伏念仏	〃 内野	火伏念仏保存会	平 11.1.26	32 号
29	〃	〃	富士山本宮浅間大社流鏑馬	〃 宮町	浅間大社流鏑馬保存会	平 18.9.8	34 号

富士宮市文化財年報 第1号

平成24年3月31日

編集 富士宮市教育委員会

発行 富士宮市教育委員会
静岡県富士宮市弓沢町150番地
電話 (0544) 22-1111(代)

印刷 株式会社 きうちいんさつ